南北

太平記圖會

貳編

肆

へ伊13
1989
12

門へ 13
號 1989
12

宮城縣図書館

南北太平記圖會卷之十一

貳篇

目錄

義貞逮平定鎌倉
宗鑒変心贖邦時
主上取笠還車雒陽
義貞奏鎌倉静謐
正成引兵泰向摂州
寂阿獅田射大蛇
少貳大伴変約討寂阿
少貳大伴及義害英時
時直乞降安堵懸命地

時春妻子沈鎌府河
時在一類滅北越
愛着亡霊現海上
正成送書降公綱
正成降千破剣寄手諸將
鎌府降桒諸將被誅
工藤左衛門鎌府述懐舊
天下政道帰公家一統
護良親王任將軍入雒陽
配流月卿帰華雒
藤房称病辞奉行
造営大内裡拯結構　附菅神辨因意始末

南北太平記圖會卷之十一

貳篇

義貞速平定鎌倉　宗鑑変心贖邦時

義貞己れ鎌倉を定て。其威遠近に振ひしぶ。東八箇國の大名高家。手を束ね膝を不屈と云者なし。多日屬隨ひて忠を憑む人ぐも如斯況や唯今まで平氏の恩顧に順ひ。歃陣に在ける者共。生甲斐ぬき命を續む為に。所縁に屬て降人と成。肥馬の前に塵を望て。高門の外に地を掃ても。己が咎を補はむと思ふ心根あはれ。今は浮世の望を捨て僧法師に成る平氏の一族達も。寺々より引出して。法衣の上に血を淋ぐ。二度人に對と髪をおろ。貌を替んとする後室とも。所々に捜し出して。負女の心を令失。悲ひろゑ義を專にして忽ち死せる人。永く脩羅の奴と成て。苦を多劫の間に受る事を。痛哉恥て忍て苟も生る者は。ところふ衰窮の身

と成て。矢ひを萬人の前に得うとて。其中にも五大院右衛門尉宗繁を。
從來欲心無道の男なり。高時色を好めるを知て。密に京家より一人の美
人を求め。己が妹と称して一橋の局を以て入道殿へ申入るゝに。宗繁う妹こそ
世に無雙姿なれ。侍まし。若他國へ遣しなん後に。入道殿の御咎も恐入て
候得べ。斯申上侍るゝと申させけるに。高時一々聞て。宗繁我とかく計
親切に思ひ給ふに不知。そこに。聽て婦人を迎へ取て類なく寵愛厚く
重恩を與へる侍る上。入道の嬪子相摸太郎邦時。此五大院右衛門が
妹の腹に出來る子なれば。甥なり主なり。何に付ても一旦はあしきと深く
被憑るゝあや。此邦時を汝に預置るゝ。若我滅びなんと聞ば深く隱し
置て如何にも能術を廻し。時到りぬと見るゝ邦時を取立て亡魂の恨
を可謝と。高時入道懇に命じ給ふ。宗繁子細候じと領掌して
鎌倉合戰の最中に態と降人にぞ出られける。角て二三日を經て後。平氏
悉く滅びぬる。関東皆源氏の顧命に隨て。此彼に隱居る平氏の一族共
數多捜し出さるゝ。捕手ハ所領と。被賞隱まる者ハ忽に被誅ぬ。五大院
宗繁是に驚き。のやく果報尽る人と扶持せんとて。適遁を得る命
を失はんよう。此人の在所を知る由を。源氏に訴人し。彼人を捕へさせそ。所
領の一所をも安堵せばやと。奸計を廻らし。或夜彼相摸太郎に向て
宣ふ。是に御座候哉。如何なる人と知候ぬ。ことそ存じて候に。如何て漏
聞え候ひぬ。舟田入道明日是へ推寄捜し出し奉らんと用意候由。唯今
或方より告知せて候。何樣御座の在所を。今夜替候ぬ。叶ふまじく
候。夜に紛まて急ぎ。伊豆の御山の方へ落させ給ひ候へ。宗繁も御伴申
度ハ存候へども。一家を尽して落候ひぬべ。舟田入道左あまべてと心付
て。何地までも尋求候べし。夫故態と御伴ハ申間じく候。跡より首尾
を見合し。追付可奉て候と。誠に尤て申候べ。相摸太郎大に力を

落し。便うげうして無詮方。左あらぬそ五月廿七日の夜半計に。忍ひて鎌倉を落らまこと。昨日まで八天下執権の主。相摸入道の嫡子にて有しを。假初の物詣で方違と云て。御内外様大名共。細馬に乗せて五百騎三百騎前後に打圍てこそ往覆せしに。時移り事替て世乃有様そ浅猿しき。怪気なる中間一人に太刀持せて。傳馬にさせる乗て。破草鞋に編笠着てそこ共不知泣そ伊豆の御山を尋て。足に任せて歩まるる。心の中こそ哀まれ。五大院右衛門加様に此人を賺し出しぬ。跡より追懸て討んとは。最安なまとも。年来奉公の好を忘まらる不忠者とて。人に指さしまるんは物憂如何にも。便宜好らん源氏の侍に討せて。勲功と分て知行せむには不若と思案し。急ぎ船田入道の許に行て相摸太郎殿の在所を委しく為知可申にそ候。他の勢を不交して生捕被差出候ひ定て其功異他候はん。告申候忠には一所懸命の地を安堵仕候様に

御吹挙に預り候はむと申さるべし。船田心中には悪き者の云様哉とは思へ先子細あるべしと約束。五大院右京門を案内にて。千の者を遣し。相摸太郎の落行道の先へ廻りて。今や遅しと待せける。太郎邦時は道に相待敵ありとは不思寄。五月廿八日の曙に浅猿しき寝の姿にて。相摸河を渡んと渉し守を待て岸の上に立てるを。五大院右衛門余所に立て。あまたにて件の人を教へ奉る。船田が郎等三騎馬より飛び下て。透間もあらせず生捕る。俄の事なれば冊の縄にて搦めて誠め張輿に乗せ奉る。馬に乗て中間二人に馬の口を引せ白昼に鎌倉へ入るまでは見聞人毎に袖を絞らぬ者はなかりけり。此人未だ若冠幼弱の身なれば。何程の支へ有べきとも。朝敵の長男にて おはしまさば非可免とて。則ち翌日の暁潜に首を刎られぬ。昔趙の程嬰が我子を殺して幼稚の君の命に替し。晋の豫讓が貌を変じて。舊主の恩を報ぜんと其程までは思はざりしに。年来の主を敵に討せて。恣に義を忘まらる五大院

右ヱ門が心の程こそ誠に希有の不道人なりと見る者毎に爪弾をして悪
む者ばかりなれ。剰へ邦時が母が右ヱ門宗繁が妹なれば。邦時を嫌て歌の千へ渡
ぬる事を恨て泣悲しむと切なりしを。宗繁他人の聞を恐て。密に殺害しなる。去ば好事不出門悪事走千里なるべしと。誰の口となく。
遂に世間に漏聞えければ。大将義貞左あらぬ彼を可誅と内々其沙汰あ
りしかども。船田入道善昌こまごまと止めて申ければ。大歌已に亡びさうとつぶやき。
其餘黨此彼に遁もて。未尽く就中高時の舎弟左近太夫入道自害
なりしかども又存生ありしも。未だ其實を不知。然るに今宗繁と誅侍ぬ。
重て余黨を所人なる者あらばと悪逆無道甚以て可憎とぞのべども。宗
繁にあめども暫く其罪をゆるさるべしと諫める故。義貞も其侭に被差
置ければ。宗繁何とやらん心悪く針の席に座する思ひなりけるが。家を捨
てさまよひ行くぞ。梟悪の罪身に譴くるや。三界雖廣一身に措に處なく
故舊誰多一飯を與ふる人無して。遂に乞食の如く成果て。鎌倉の街に
飢疲もて有ければ。或者打殺しなりとぞ聞えし

主上執筆還幸雒陽

義貞早馬奏鎌倉諍論

都合五月十二日千種頭中将忠顕朝臣。足利治部太浦高氏赤松次
郎入道圓心等。追々早馬を立て。六波羅已に令没落の由。船上へ奏聞す。
依之諸卿僉議あり。則ち還幸可成否の意見を献ぜらる。時に勘解由
次官光守。諫言を以て被申ける。両六波羅已に雖没落。千破屋発
向の朝敵等。猶幾内に満て。勢に京雒を呑り。又賤き綾に東八ヶ國の
勢を以て。日本國の勢に對し。鎌倉中の勢を以て東八ヶ國の勢に對せ
んか。去ば承久の合戦に。伊賀判官光季を被追落しかば。輙く亡ぶ共。
坂東勢重て上洛せば。時官軍戰ひ負て天下久しく武家の權威に落
ぬ。今一戦の雌雄を測るに。御方は絶に十に二を得ぬ。君子不

近刑人と申事候へば。暫く皇居と不被移。諸國へ綸旨と被成下
東國の変異と可有御覧候やうに奏せられ。當座の諸卿悉く
此議に同せられ。而るに此度理の的當なる雅申哉。主上猶時宜
定め難く被思食。自周易と被うせられて。還幸の吉凶と著筮に就て
被御覧る其御占師卦る。曰師貞丈人吉无咎。上六大君有命開
國承家小人勿用と出る。又王弼注云處師之極師之終也。大君之命
不失功也開國承家以寧邦也小人勿用非其道也と注せり。御占已に
如斯。此上は何と可疑とて。閏廿三日伯耆船上と御立有て腰輿山陰
の東へと被催る。是を諸卿六波羅の没落を聞て一日も早く京へ上り
て故郷の月を詠め親しき人にも會はやうと被申。君を都恋さに。
明暮被仰に依て。御並の事有て。斯還幸に及び る。路次の行粧例り
替りて。頭大夫行房勘解由次官光守二人計こそ衣冠にて被供奉
る。其外の月卿雲客衛府諸司の助は皆戎衣にて前騎後乗と六軍
尽畳畳と著し弓箭と帯して。前後三十餘里に支へり。鹽冶判官は千
騎にて一日先立て前陣と仕る。又朝山太郎は一日路引殿と五百余騎に
て後陣に打る。金持大和守錦の御旗を差て左に候。名和伯耆
守帯剱の役にて右に副雨師道に清め。風伯塵を拂ふ。黙微北辰の
拱陣も角やと覚へ厳重なり。さるに去年の春隠岐國へ被移させた
まひし時坐に宸襟を被悩て。御泪の故とぞ思へり。山雲海月の色も今は
龍顔と会光端と成て。松吹風も自ら万歳と呼ぶに被寄。鹽焼浦
の烟すら賑ふ民の竈と成り。五月二十七日に播磨國書寫山へ行幸
成て。先年の御宿願と被果。緒堂御巡礼の次に。開山性空上人の御影
堂と被開。年來秘し る物と覚へ重宝ども多くに。當寺
宿老と一人被召て是いかなる由緒の物共ぞと御尋あり

菊地進で探題美時と戦ふ図

老畏て一々に是を演説仕り候べし。主上不斜信心を頒けさせ給ひく。
則ち。當国安室の郷を御寄附有て。不断如法経の料所にぞ被擬る。
今に至まで其妙行片時も懈る事なくして。如法如説の勤行たり。
滅に滅罪生善の御願難有かりし事共なり。二十八日に法華山行
幸成て御巡礼あり。是より龍駕を被早て。晦日に兵庫の福厳寺
に云寺に。儲餉の在所を點じて且く御座有る處に。其日赤松入道
円心父子四人五百余騎を率て参向し。龍顔殊に花々しく。天下草創
の力。偏に汝等見負の忠義によれり。恩賞は各望に可任と感歎は
ほて禁門の警固に奉侍せしめ給ひ。此寺に一日御逗留有て。供奉の行
列還幸の儀式を被調る處に。其日の午刻に羽書を頸に懸る早
馬三騎門前まで乗打して庭上に羽書を捧ぐ。緒郷驚て急ぎ
披きて見給へば。新田小太郎義貞の許より相摸入道以下の一族従
類等不日追討して東国已に静謐の由を注進せり。西國洛中の戰ひに
官軍勝に乗て。西六波羅を雖責落関東追伐の事は由々しき大変成
べし。叡慮を被回る處に。此注進到来しぬるに。主上を始め進らせて。
諸郷一同に猶預の宸襟を休め。彼悦称嘆を被尽て。則ち恩賞を宜
依請と被宣下て。先使者三人に各勲功の賞をぞ被行る。此時楠正
成は千剣破の寄手を。南都の方へ追落しぬるよ。今其地に落集るを。尚
五万騎に余りぬべし。此勢を以て雖中へ押寄んと企る趣を相聞える
故。正成京都へ使者を立て。足利赤松佐城等をかたらひ。早く南都へ押寄
可被申。正成搦手承んと再三使節に及ぶとぞ。兎角して変を不果正
成数息して云。此上は無是非我手勢計にても可打向。太平竜城に疲れ
る兵を以て退治せん事甚だ難し。先主上を京都へ送て奉りて其後
事を謀るべ。若金剛山の寄手不意に引返さんも謀べからずとて。頻に其備

と定め。遂に手勢を引率し。主上御所の為摂州さして打立給ふ

正成引兵参迎兵庫

菊地槲田射大蛇

此時主上八兵庫に一日御逗留有て。六月二日被回瑞輿。處に楠多門兵赤

正成五千騎にて此所に参向せ。其勢殊に勇々しくぞ見えける。主上

御盧を高く捲て。正成を近く被召大儀早速の功偏に汝が忠戦に在

と。感深く被仰出候へ。正成畏て被申上候。是君の聖文神武に不

依。微臣命を尺寸の謀を以て。強敵の圍を可出候乎と。功を辞して強

下る。既に兵庫を御立有る日よりも。正成前陣を奉つて。畿内の勢を相

順へ。七千余騎にて前驅を其道十八里の間干戈戚揚相挾左輔右弼列

引。六軍次を守り。五雲閑に車を運ばる。六月五日の暮程に東寺へ臨幸

成る。武士に成る者八不申及摂政関白大政大臣。左右の大将大中納言

八座七辨五位六位。内外の諸司醫陰両道に至るまで。我劣じと参聚り

べ車馬門前に群集して地府に布雲青紫堂上に陰映して天極に列星に

翌六日東寺より二条の内裏へ還幸の行粧千種頭中将忠顕朝臣帯

劔の役にて鳳輦の前に被供奉ける。尚非常を慎む最中なればとて。

帯刀の兵五百人を二列に被歩。足利高氏日直義二人八後乗に順て百官の

後に引副衛府の官ども。騎馬の兵五千余騎甲冑を帯して被打ける。

其次に佐々木判官七百余騎。土居得能二千余騎。楠名和赤松結

城長沼盬冶已下。諸國の大名八五百騎三百騎。家々の旗を押立一勢々々

引ひろげて輦路を中にして左右の小路を固めこそ打ひろげけれ。凡路次の

行粧行列の儀式。前々の臨幸に事替て。百司の守衛厳重也見物の貴賤

街に満て。唯帝徳を頌し奉る声洋々として耳に盈り。内裏に還幸成て。

其日先臨時の宣下有て。足利治部太浦高氏。治部卿に任ず。舎弟兵

部太浦直義。左馬頭に被任。朝敵退治の軍功。此二人に限らずあらん人数

て今日此兄弟而已臨時の宣下被行叉全く三位の局御口入粤て始て
犯とぞ申けゝる。かゝる京鎌倉の義貞高氏正成四人等の武功に
依て静謐なりぬ。此上は桑弊へ紂手を被下て九州探題英時を可
右征伐とて二条大納言師基卿を太宰の帥に被成てまづ下し奉
らんとその催しありける処に。六月七日大伴少貳菊地が許より早馬
同時に京着して。九国の朝敵無残所退治ひぬと奏聞を。其合戦の始
末をくはしく尋ねに。元来太宰小貳貞経入道妙恵敷代太宰府の職
を武家に奪れ。所領せられて無念に思ひ。ひそかに色
々と出さで居る処に。先帝船上より緒国へ綸旨を被成下
聞及ぶ所の幸ひなれば。九国に英雄の名ある者。菊地島津の両家
なり。ちかまでも島津を道遠けれ力とすべかりしに。通ず菊地我
同心せざるに於て事調ひがたしと思ひ煩ふ処に。大伴出羽守貞親入
道具簡。頼朝卿より薩広日向両国守護職の御判を賜りし
うじも。名のみにして北條敷代兎角して延て今に不免是恨を
含んで。又洪及の志あり内縁によりて。少貳の方へ密に此趣を申遣り
ければ。太宰少貳は大に悦ひ。速に同心の旨を申遣を但し菊地は意せ
ざるに支危し。如何に也て菊地一家を能かゝらせんに少貳は太事
侍りて菊地に不快に候ぬ。黙止はうとぞ伸さるゝ。太宰菊地肥
後守武定入道寂阿は薄倉にさしうらみ恨をうけまどる。此入道帝に文
を好み武を嗜み道に背くことを恥とし。故に當時鎌倉の政道皆かつて
邪まなり。是相州可給亡寺の来てくれや。抑日本は神国なり如已前
公卿の御政敗るや可成又如何なる者か六十余州を掌握せんと常
々申出してありけるに。一日摘が披見せし未来記の案文を得たり。寂
阿是を拝見し。去は大權聖者未来を鑑てひしと支れば。明鏡に萬

象の浮むが如し。さてハ天照太神の御子孫、再び天下の政を執給ひぬ
こそ嬉しけれ。うど申さうけるハ、大伴が方より、密に隠謀の旨申来り
けるぞ。子細すく領掌し菊地より速に船上へ三人同意して御方に参
ず不日に旗を可擧由を奏聞せしうへ。則ち綸旨に錦の御旗を副て賜ア
ける其綸旨の文章専ら菊地の家の面目とぞ意なりける。少貳
も大伴も案に相違して不悦。如斯うる綸旨あてハ緩ひ御方に参り大功
を立るとも。菊地に其功を奪ハるべしとて。猶預の心ぞ付さうけるなり。斯る
処に探題英時何國より偏聞ける。少貳大伴の両人野心の企あり。
其実否を糺さんとて。隠に菊地寂阿を招き謀を可糺とて。菊地もその
典黨なりとて不知呼寄けるに。菊地ハ却て此使に肝付て。さてハ彼隠
謀既に露顕して我々を欺き寄て。討取んと謀けるぞ。左あらんに於て
ハ人に先をせられんとて。此方より遁て博多へ押寄。覿面に勝負を決
せんと思ひたまへ。兼ての約諾にまかせ。少貳大伴の方へハ幡弥四郎宗安
と云者を使して右の趣を申遣しけるに大伴ハ綸旨の文面不快を抱し
上。當時天下の落居未だ如何とも見定ぬ事なれば分明の返事を示
成少貳も綸旨の文章心に不染其上京都の合戦頻に六波羅勝
乗と聞えければ。かくてハ官軍憑むべきとて。俄に日頃の約を変じ已の罪
を補ハむとや思ひけん。菊地が使弥四郎宗安が頸を討て探題英時が館へ
送てけり。此時探題英時ハ少貳大伴が野心うたがはるべき。菊地島津松浦
の輩を以て征伐せんとおもひ此輩を相招きけるに所に豈さるべきや。少貳が弟よ
り菊地隠謀を企て我にも與せよと申。語らひ間使の者の頸を討て進せ
侍るよし。申来りければ英時大に驚き。少貳大伴こそまさしく叛逆と聞
えられ憑切たる菊地入道斯隠謀あるべしとハ思ひもよらぬ偽りをおのが
菊地が家の子宗安が首に紛れなし。同文まさに菊地の花押なり。今より何

者と憑し維を力とすべきことを最便りなく見えしかども菊地が少貳が八幡宗安を殺しなる事を大に怒て口惜き事なる斯る不當人と憑こそ此一大事を思ひ立ざるこそ越度なれ好々此輩の與せぬ軍いせまじざるうとて。元弘三年三月十三日の早天百五十騎を特ひて急く探題の館へ押寄る。路次で宗徒の郎從追々に馳付て。程なく二千余騎にぞ成る。菊地入道寂阿阿蘇の宮に詣で胡籙の表矢一ツ軍の門出に奉るとて

武士の上矢乃鏑ひとと節くあるの心を神ぞあるらん

と詠ず。又櫛田の社の前を打過ぎ申る時。寂阿が乘る馬俄に倒て一足も前へ不進得入道大に瞋を立如何なる神にもあらせ一天下の君の為に寂阿が戰場へ向ひ給る道にて乘打を尤も可給様やある。其義なくば矢一ツ進せん受て御覽せよと呼ひ。上差の鏑拔出て神殿の扉を二矢まで射るに矢を放と均く馬のまくらに直てくるまぶ左にぞと嘲笑ひ則ち打て通りぬれ。後に聞べ社檀に二丈余りの大蛇。菊地が矢先に懸て死にけるこそ不思議なれ。菊地はかくる事とは思ども乘打を神の咎めなんと思ひて。神殿の扉と射るしるしを畏て礼をなしけるも。此大蛇の目來神威をかりて。人民を惑し惱ますに不堪退治しなんに最心よくこそ覺えぬれ

菊地進戰探題英時　少貳大伴麥約討菊地

太程に菊地は博多近く押寄て。一々心に思ひ給へ。今探題の郎從及び集り勢は三四千騎もあるべき空く城を出て平場の軍とるべ。然るべ勝ととて掌の中にあるとて。少貳大伴が後詰の事に氣不有兵を三千に分て進ませれば。如案探題英時が四千余騎。汐の干潟と前に當軍を分ること七ツにして。陣を張。菊地も干潟より七八町退て陣を居るが。干潟を越て戰はんと欲べ敵は大勢に待て戰んと欲れば。

歟不來如何ともすべき樣なきに菊地心に一つの計を案じ日中軍の一手を押出し一千餘を越て軍を始め。能く敗まて引退く英時が七手の軍勢。丁潟を越くこれを追とつゝく。油断せずして備を不乱無て期し云る支なれば。菊地が前陣の一手迎ひ合して暫く戦ひ脉を挽と引退く英時が勢こゝに搦を得て備を乱し跡を攻て追かゝる菊地が後陣の勢い歟の備の十分に乱まろと見て太鼓を打て剛に進む。詐り北ゝる菊地が前陣中軍。笠印を立直し備を堅めて相懸ると引返し。英時が勢の乱を立ゝる中へ會釈もなく懸入く三方より責立るまゝ英時が集り勢立足もなく大に破る探題の執事齋藤日向の八郎も討死し散々に成て北退く。菊地入道い中軍に在て前陣後陣の二軍を下知し。備を乱してこまと追せ中軍の一陣備を不乱其跡に續き英時が七千の勢一度も返をて不能して残り少なく

被打成鎧を差てそ北ゝる。此時探題英時ハ六百余騎ふて城を守る。軍の場所へ出ざりゝる。味方如斯敗軍して悉く逃ゝる驚き周章て詰の城へ引籠る。菊地い勝に乗て左ちひし支よ。物ゝ軍ゝる城を落して英時が首を見んと。日の中にあゝと勇る。鳥飼の宿に火をうけて探題の館に押寄屏を越関を打破て早城中へ込入る英時事の急なるを見て己に自害に及んとせし處に。忽然として住吉の上ゝ。幾流もの雲を差つゝ少貳大伴が後攻一万余の軍を五六隊に分て菊地が後を取切ゝる。是に力を得て城中の兵色を直して前に進ゝる菊地が陣中俄に乱れ騒ぎ前後に途を失ひて討る者數をしらず。菊地入道今ハ遁れぬ所とおもひ切れば嫡子武重に向ひ。我今少貳大伴に被出接て此死地ふ入とのべる。義に固て命を墮とも不悔然れば叔阿に於ては探題の城を拠りて討死せよ。汝ハ急ぎ本城に帰り時節を伺ひ。我生前の恨を死

後と報ぜよとて兵を二つに分て七百余騎を武重に差副へまゐ歌の勢の重らめ先に疾肥後に帰るべしと急がせ泪の中に故郷の妻子彼類乃出しと終の別をしも今やと帰るを待やんとぞ哀れと催し泪の中に一首の歌を案ず袖の色印に書付て故郷へ送らるる

故郷に今夜だにの命をもちぐでや人の我をまつらん

武重は五十に近き父の只今討死すると見捨のうで本国へ立べき兎角も生死を一所に成申べしと勇こそ入道声をあげ父子に向ふ

こと世を又子に被討べし。我は老て未憑こそ此所に死せん。汝は早く国に帰りて家を継。天下の御用にも相立べし。汝と留る事専ら是あるとて。父が庭訓堅くまぼ武重も力なく。是を最後の別と見捨七百余騎を引率し。泣々肥後へ立帰る。心の中こそ哀れ今は心易しとて菊地入道寂阿。同二男肥後三郎武春共勢二百余騎を前後に立て。後攻の勢に入る日も不懇探題の館へ懸ぬ一足も不退差敵と突達て一人も不残討死を。嗚呼専諸荊軻が心は息の内に仕る。候生豫讓が命は義に依て軽しと云是等の事にや申べき。去ども其時は九死一生の危きを逃れ厚く少貳大伴と賞又暫く九州に威勢を輝を。義に少貳妙恵大伴昊間は今度の行跡人に非ずと天下の人に被譏。暗不知して世間の揉と聞ゆる処に五月七日西六波羅已に被責落て時益仲時共に亡び千破剣の寄手も悉く南都へ逃退きぬときこそ小貳入道妙恵大に驚き。我不討官軍に背き罪を菊地に得しと。如何をべきと思慮とめぐらし。此上は今一度隠謀を企て。探題英時を討取夫を功として身の咎を遁まんと思ひ入まゐ。又菊地肥後守武重と大伴入道昊間が密々使者を遣はして相語ふに。武重は眼前変心して父を被害し敵なれば。耳にも不聞入。大伴昊間は六波羅の揉子を聞て仰天し。我も咎ある身なれ

び角てや助うんとて。即時に領掌とあーてんぐう。依之今日事や起さん。明日事と謀らんと。日と撰ぶ日と送るる悪し。探題英時少貳に斯る企あり と聞て。事の實否を伺ひ見よとて。長岡六郎を使として。少貳妙恵が行へぞ遣しける。長岡則ち行向ふて可見参由を云ふべし。妙恵時節相労る吏あるとて對面せず。長岡無詮方。妙恵が子息兼後守新少貳頼尚侍より至り。太守おき様して彼方此方を見るに。唯今にも事を起さん形勢よて。掃と矯せ鏃を砺又遠侍を見るに。蟬本白き青竹旗竿あり。されば こそ舩上にうり錦の御旗を賜ひ。さりと聞えしが。実にてあるべきぞや。嘯きて うゐ對面せず。頭て差違へんどする者とと心ゑして侍る處に。新少貳頼尚 何心なげにて出合ふる。長岡は物よくぬ男なれば。座席着と均しく 直うさ人々の謀反の企うるとと云伝へ。腰の刀を拔て頼尚に飛かかる頼尚 飽まで心早き者なれば。側なる象戯の盤をあつ取て突刀と受と

め。長岡にむずと引組で上を下へと返しける。少貳が即従あまたあり 寄て上なる長岡を三刀指て下なる主を助けける。長岡は遂に本意 を不達して。空しく命を失ひぬ。少貳入道此由を聞てさては我企 もや探題に被知てんぬ。今は不得休事所なりとて。大伴昊間其外 與黨の方へ牒ト合せ二千余騎にて太宰府を打立ける。三原味坂原田 小田高木熊代の輩追々に馳集る大伴も約を不違。白木緒方新海竹 堀屏諸等を隨へ三千余騎にて來りける。少貳大に悦び其勢都合七千 余騎五月廿五日卯刻に探題の館を二里隔て陣を取。大伴笑ふ一里退て大利 と云所に陣を取て吉左右よと悦び暫く人馬の息を休め。正午を合図 に押寄る

少貳大伴叛義伐英時　時直乞降安堵懸命地

太程に少貳大伴もと心替りして押寄と聞て。探題英時も山鹿秋

月草野。下松浦。上松浦。宗像等を隨へ。二万七千余騎にて城を出て戦ふ。
歓味方の中に一ツの河あり。さしもの大河にあらざれども。此頃五月雨降
つづきて水増さる。時しも差潮満來て。可渡様もなきまで。歓も味方も
戦ふべき使りなくして。矢軍に時を移す。新少貳頼尚の内ふ宗の
十郎とゝの者。進み出る程の小川に水倍増なまでして。何程の事かあらん。
我に續け者共と呼て。無二無三に川へ飛入ぬ。差潮既に引口に出て。水
は胸を過る程なりけり。少貳頼尚是を見て。扨は川は浅きなりけるぞ渡せや
者どもと下知しければ。其手の兵千五百余騎。少しもためらはで川水を
打入て。向ふの岸へ懸上る。探題の方には宗像の大宮司二千余騎にて一陣を
おこす。屯を調へて川越歓を防んと欲する内。歓もや川を渡しめる上片辺より
備へ〳〵。草野松浦。俄に及忠して歓とるり。出と喚て横合より。宗像の
勢を八方へ打ちしに。勢に乗て探題の本陣へ切入ぬれば少貳大伴是に力

を得て。歓に及忠の者あるとも覚ゆるぞ。討とる者共と呼ばりて。真先に
進みたれば。惣勢一同に川を渡し。勝に乗て切なりけるぞ。英時は兵忽かふ
開き難きと被討者数をあらば散々に成て館の中へ北奄る。少貳大伴の
惣軍北にと追ひ。館を十重廿重に取圍息をも不継責詰めれば世の手の
風俗義を重ずる者は少く利に越人多くまで。今まで付順ひつる九州の
兵。恥を捨て落失るもあまた。又名をも不惜翻て縁に依て降人に出るも
あり。城中以の外の無勢に成てけり。宗像大宮司。山鹿兎前守の両將名
濵の二の太戸を支て居たりけるが。つゝうの心変りして俄に木戸を押開き。
歓を城中へ引入れまで。少貳大伴の軍勢透もあらせず。館へ乗入陣前にふ
火を懸ければぞ。僅一朝の戦ひに英時遂に打負て忽ち腹かき切て火の
中へ飛入ぬまで。一族良後三百四十余人續て腹を掻切て同じ煙と成り
ぬる。嗚呼悪むべし。少貳大伴は探題に順ひて菊地を討。今日は官

軍に属して英時を討。行路雖不在山兮不在水唯在人情反覆之間と白居易が書たる筆の跡今こそ思ひあはされぬ

此時長門の探題遠江守時直は京都の合戦難儀の由を聞て。六波羅ふかを勅せんと。大船百餘艘に取乗て海上を上りけるが阿波の鳴渡にて京都も鎌倉も早皆源氏の為に被滅て天下悉く王化に順ひぬと聞えられだ。時直大に驚き此上は艚を漕もどして九州の探題英時と一つになんと心ばせにて赴きける。赤間が関に着て九州の様を伺ひきく小築紫の探題英時も昨日早少貳大伴が為に亡びぬ九国三島悉く公家に属しぬと沙汰しける程に。且催促に依て時直に属ひける兵共もうつろふ心替りして己が様々に落行る間。時直僅に五十余人に成て極浦の浪に漂泊し彼島に帆を下さんとしける所に歙鏃を支て待うけたる此浦に纜を結んとしける。官軍掃部と雙べて討んとす。落残て附従ふ人々はさて今は心を仲津浪可立敗方もなく可寄所もあらざる。世を浮舟の棹を絶て思ひ定め風に漂ひぬ跡に留めし妻やゝも如何成ぬらん責て其行末を聞て後心安く討死をもせばやと被思ける且く命を延んと為に郎等と一人舟より揚て。小貳島津が紆へ降人に可成と傳へける小貳島津も年頃の好に飽うるまでやあるひけん。今の有様最哀なりやあるひけん。急ぎ己が宿所へ迎へける。其頃峯の僧正俊雅と申せしは君の御外戚にて坐置合戦の刻に。巽前の國へ被流あるべしと今一時に運を被開て。國人皆其左右に慎に隨ふよし。九州の成敗勅紆以前に暫く此僧正の紆に在しける。小貳島津彼時直を同道して降参のよしを申入ける。僧正子細あるべしと被仰て則ち御前に被召ける。時直膝行頓首して敢て不平視遥の末座に畏て平伏したる體を見るに。僧正涙を流して被仰ける太元弘の始号無罪して此所に被遠流し時。遠州時直。我を以て寇と世

うべ。或ハ過分の言の下ニ面を低て泪を推拭ひ。又ハ無礼驕の前ニ手を束て恥を忍ぶ。然るに今天道讒ニ祐ひして。不測ニ世の変化を見る吾凶相乱ル世栄枯地を易ル。夢ニ現ニ昨日ハ吾身の上を悲ミ。今日ハ人の上を哀む。然を報ぶるに恩を以てもて云事あるべ。如何ぞ命を可申助と被仰ケるべ。時直頭を地ニ付て。両眼ニ泪を浮めて。不日ニ飛脚を以て此由を奏聞ありくるべ。則ち勅免在て懸命の地を安堵せ〳〵るる。時直無甲斐命を扶て嘲を万人の指頭ニ受とつゝも心中ハ秘て時を一家の再興ニ被待ケるる。幾程もあらぬに病の霧ニ被侵て夕の露と消ぬるこそ本意なけれ。

時春時有一類滅北越　愛着亡霊現海上

爰ニ去ル比河右京亮時春ハ京都合戦の最中北国の蜂起を鎮ん為ニ。越前国ニ下て大野郡牛ヶ原と云所ニぞおはしける。幾程なく大波羅没落の由聞ニけ。相順ひける国方の勢片時の程ニ落失て。妻子従類の外ハ事問人も無てくり。同国平泉寺の衆徒等。此事を聞て鉦打を得ては。早く時春を討取て。彼が跡式を恩賞ニ申賜ん〳〵と。自国他国の軍勢を語ひ。七千余騎を率して。五月十二日の白晝ニ牛ヶ原へぞ押寄ける。時春勢ひ尽て死の窮まりを知。二十余人有ける良等ハ向ふ敵を防ぎ。あくまで近き所ニ僧の坐ケるを請じて。女房小さ人すべも皆髪ニ剃刀をあて。三帰戒を受させて。偏ニ後世善提の経営を泪の中ニぞ被致ける。戒の師帰て後。時春女房ニ向て被申ける。二人の子ハ男ニて侍ば。稚〳〵とつゝも歎ハ命を助くまゝ〳〵覚ゆれ。間冥途の旅ニ可伴御ハ女姓ニて坐ば。縋ひ敵角と知ても命を失ひ申迫のあはれ。扨も此世ニ存在ては如何ぞ人ハ相別て憂を慰む便ハ付うべし。然る時ハ無恐と云ども心安く草葉の陰ハ

時春時有
一類北越ふ
滅ぶ図

嬉しく思ふべくもなくして泪の中に掻口説きて被申ければ女房最恨こそ
水に住鴛鴦深く巣を食燕さへ翼をならべ契を不忘況や相別進らせて
不覚過めぐる十年余りの袖の下に二人の子共をそだてんと祈
無甲斐御身は今秋の霜の下に伏し少き者は朝の露に先立て消ぬ
あむ後の悲しさよ。堪忍びては時の間も存在べき我身なれども迚も思ひ
絶えぬて生て可有命なれども。同じくは思ふ人と共にとこそ成果て埋る
苔の下までも。同穴の契を忘まじく泪の床に臥沈む。去程に防矢射
つる良等二十余人も既に被対敵徒の大勢。箱の渡りを打越後の山
廻りに聞えければ。五ツと六ツとは成る児を鎧唐櫃に入て二人の乳母に
前後を舁せ。鎌倉河の淵に沈めよとて泣々見送り立ければ母伐も
同じく淵に身を沈むと。唐櫃の緒に取をりて歩をつぞぐ心の中。被思
遣て悲しく。彼淵に至り唐櫃を岸の上に舁居て。蓋を開ければ二人
の少子共を差挙てこそ我母君何国へ連行るぞ。母御の歩るぞ来
せ給へとて御痛しく候。是は乗らせ給へと。何気なく被申ければ母は流
る泪を押へて。何地に伴ふべき此河は是極楽浄土の八功徳池とぞ少き
人達の生まれて。楽しく遊び戯る所なり。母も續て可参は間。我如く念
佛申て此河の中へ被沈候へと教へければ。二人の少子母と共に手を合せ。
念佛高らかに十声ばかり唱へて。西に向て坐しぬるを。二人の乳人一人は掻
抱きて碧潭に飛入ぬれば母御も続く身を投て同じく流れに被沈ぬ。
時治も遥に此有様を見て後。自害して一堆の土とぞなりにける。閻生
則忘と云申ぬるぬ。又一念五百生繋念無量劫と聞時は奈利八万の底
までも思ひの炎に焦れ。ふんと哀れ也ける事ありけり
爰に越中の守護名越遠江守時有舎弟修理亮公有其甥兵庫
助貞持の三人は。出羽越後の宮方北陸道を経て。京都へ責上べきよし

きこえくるまゝに道にて是を支へんとて。所國の二塚といふ所に陣を居て近國の勢を駆催しける処に六波羅已に被責落て兩條亡び東國にも軍起て鎌倉危しと聞えくるまゝに。催促に順ひて唯今まで馳集り居る能登越中の兵共。抜〻〻く放生津まで引退さで。却て守護の陣へ押寄んと企る。是を見て今まで身に代命に代らんと。我を存じ忠を致しける郎従も。時の間に落失て剰へ敵軍に加り。朝に来り暮に往て交を結び情を深くせし。朋友も忽ち心を変じて。却て害を挿む。今は残り留まる者とては三族に不過一家の輩。又は重恩を蒙りし譜代の侍僅に七十九人也。五月十七日の午刻に敵已に一万余騎を押寄ると聞て。我等此小勢にて悪き軍にて無云甲斐敵の手に懸て。縲紲の恥に及だん度。後代の嘲を口惜くぞ。敵の近附ぬ前に女姓少き者共を舟に乗て澳に沈め。我身は城の中にて自害をせん

不然にて遠江守時有が女房は僧老の契を結びて今年廿一年に成れば。恩愛の懐の内に二人の男子を育て。兄は九つ弟は七つにぞ成ける。修理亮公有が女房は相別て已に三年に餘りぬるが。唯る〻ぬ身に成て早月頃過ぎ行く。兵庫助貞持が女房は此四五日前に京より迎へ取りて上臈女房にぞ有ける。其昔紅顔翠黛世に無類有様風に見初し珠簾の隙もたのもしく心にうけて三とせ餘り恋慕ひける。兎角術を廻して偸出してぞ迎へ取ける。語らひ得て絶て眼日今日の程なれば逢に替らんと。歎き悲しく命を惜て。恋まどひける月日は天の羽衣換尽さで程経しも長く。相見て後のくるしき春の夜の夢にも短し。巫山の雲忽ちに晴て此悲しきに逢ける契の程こそ哀なれ。末の露本の雫後も先立道をとこそ悲しきに。あと聞つるに浪の上煙の底に消て魚まこん別まの物憂さ。そもそも如何をぐきて。互に名残を惜こそ。伏

まろびてそ彼泣るる。敵早寄來るやらん馬煙東西に揚て見え候と騒き
るるに。女房少き人々は泣々船に取乗て遠の澳に漕出る。うらうらしく追風
や暫しもやまで行人を。波路遥に吹送る。情なの引塩や立も帰らぬ漕船を。
浦より外に袖ふらん。彼松浦佐用嬪が玉島山にひきのぼりて。澳行船を招
きしも今の哀まに被知るる。既に水手櫓をかひて船を浪間に差出け
まるに。時有の女房に二人の子を左右の脇に抱き公有貞持二人の女房手
に手を取組で同じく身をぞ投る。紅の衣逢袴の暫く浪に漂
へ。芳埜龍田の河水に落花紅葉の乱れ散るに知くに見るるが。寄來る
浪に紛まて沈弟に沈むを見るに後。城に残る留るる。主従七十九
人舘に火をうけ同時に腹を掻切て。猛炎の底にぞ焼失せる。其亡霊幽
魂尚此地に留つて。夫婦愛執の忘念を遺るるや。近頃越後より
上る船人此浦を過るに。俄に風向ひ波荒るる間後を下して澳に

船を留めらるる。夜更浪静つて松濤の風蘆花の月。旅泊の趣き最心
凄しき折節。遥の沖に女の泣悲しむ声のきこえるる。是を怪しみ耳を接
て処に。又浦の方に男の声して。其船爰へ寄て給へと。声々にて呼ぶ
るる。船人止まるを得ずして。船を渚に寄るれば最清げなる男三人あの澳
まで便船申さむとて。屋形に乗るるる。船人是を乗て澳津塩合に
船を差留るるば。此三人の男船より下て漫々たる浪の上にたたるる。
暫くありて。年十六七二十ばかりなる女房色々の衣に赤き袴踏くくし
るるに三人浪底より浮て出る。其支とるく折あるまるる様かな。男世
に睦じげなる気色にて。物云相互に寄近付むとしるるる。俄に猛火海
中より燃出て。火の男女の中を隔るるば三人の女房は妹背の山の中をよ
おのひ焦まるる體にてあつあつと叫びて波の底に沈て見えぬどもるぬ。
三人の男は浪の上を游ぎるるに。二塚の方へぞ歩を行るる餘りの不

思儀さよ。船人其男の袖を引て。去よとも雖人よて御渡りひやうんと
問ふ。男答て曰我等名越遠江守殿修理亮并兵庫助と名乗て
かき消さ様に失よる。さまべ天竺の術婆伽が國王の女を恋て思ひの
炎に身を焦し。我朝の宇治の橋姫が夫を慕ひかさ〳〵袖を浪に浸
さ是皆上古の不思議舊紀に載る所なり。今親て斯る事の現に見え
ふる。亡念の程こそ罪深く覚えれ

評に云能登越中の兵皆心変して。二万余騎二塚へ襲ひ来る
ときのて。名越時有殿公有殿持の三人其良役にも都合七十九人
同時に自殺せし事勇あり義あり。何の心に憶しる所有て女房に
執念を残さむやと。ものの妖怪なるべきを船人を證に是を実させん
為にかく記しるすやとぞ

正成謀宇都宮公綱　正成降寄手諸將

京雒九州北越ともに静謐如斯なりとつゞく。金剛山より引退さし

平氏の輩播南都に留て敵なりつゝさ方もかゝるまべ。此上は軍勢の不足已
前に早く京都へ押寄て一戦に勝を曝し名を王城に残さんと。諸將評定
をなしし。其聞えありくまべ。主上速に楠正成を被召此事如何と御
尋ありくに。正成謹むて御答申やう。窮鼠却て猫を噛の風躰此時に
當て候。鎌倉滅亡前に比べて東國に可引怒の御座ぬべし上下一知て戦
支ふるべき。今六波羅既に亡び。鎌倉も滅亡して。敵の方を失ひ一身
遁るまじきと知て。必死の戦ひを可為事必定と存じ。然るに自餘の者
共に恐るゝに不足ぬ。宇都宮公綱紀清両黨七百余騎にて般若寺に磬
候よし。此者驍勇勝れたる者にて。死を窮て戦ひ。縦ひ勝利を
得ずとも大に御方を損ずべきにて。謀を以て御退治ひたもひと。然べく
候と奏しくるるぞ。鬼も角も正成可相計旨勅諚あり。正成畏て奉り
て申様左ぬべく宇都宮に編旨を被下敵に武勇の誉聞感浅ろ

を召し憑じて罷上らば。本領安堵の支子細あるべしと勅定あるべし。速に御方に参ずべし。助け置くべきぞ。又野心を挟む男も候まじ。宇都宮御方に参ずべし。諸軍大に力を失ひ可申と猶又其余降参の輩も日頃の罪を免して一命を助けられ忠あるべし賞あるべしと御下知候べし。我もしくは降参可仕すべし。左ひだり関東の諸大将も十人三四人被生捕て参ず可申と云ひし。奏聞申さるべし上一人より諸卿一同伊義も申さるべ者なり。時を不替正成罷向ふべき旨。被仰出しうべ。正成重ねて申上られるべ。宇都宮より綸旨の支正成取扱ひ申べ。彼綸旨を軍門に曝しけり。降参人仕間敷。其故は常に某を目に懸何支も負じと心得べ。唯今綸旨を使正成に申べ。愚なる我を立べ。何率大将を一人被仰付某搦手に向ひて。謀を施し大手の大将に綸旨を被下候べ。弓矢の道面目あるべ。似て候得べ降参可仕候。然る時又血を不塗して敵を滅し。泰平を期し候べき也と奏しける。宜も角も正成ぞ。ひさしくして。中院定平朝臣を大手の大将にして。五万余騎大和路より被差向。正成は六千余騎搦手の大将にして河内路より。向ひける。正成先敵の様子を可伺とて。細作を以て南都の體を見せるに宇都宮公綱紀清両党七百騎にて。當千の一の木戸にて。般若寺を堅め。其余の諸大将は東大寺に備を立ると申。正成さればこそ我が思ひ不違。好々此上も宇都宮を一謀りにくるべしと思ひ。辯舌巧なる僧を一人語らひ。正成一通の書翰を認め。別に盟文を添て。彼僧を使にして。公綱が方へ遣しける。其書に曰

貴公多年経營浴於平氏之武恩之間忠勤無闕蹟於武命而事忠戦命軽於塵埃身薨於死灰其誉聞遠近而在天下厝而已然而今平氏一時亡而柔　萬乗君兎御於遷幸之

圍而遂使儼嚴輿之威儀促鳳城之還車之處公等猶成群而横干戈之條宸襟未穩故正成軍屯而赴餘黨誅罰之使節是勅命之重者也暫准高時已亡鎌倉六波羅敗北於京都而趣死地之間骨骸埋沒欲扣土中無其戰功併非公等之過貴公天王寺住吉之一挙此般千破剣軍労正成所知諸將所聞英雄良弼之武功雖愬天下之群將而運之通塞時之否泰難如何孔明死病病李陵降夷狄非無智勇公者仁義之勇而君臣義既盡兮公之忠節可謂勲号當此時或公綱此書を披見し。急ぎ一族若黨を集めて。此義如何と各の異見を尋ねるに。宇都宮ゞ良役今井藤内と云者進へ出て申ゝるは。未座の諫恐れ多きとは云へども。北條日頃の天下憍極つて。万民皆其亡ぶるを待事大旱の雨をもつゝぶ如し。而して幾程なく滅びるは是天の運所ふあらぎや然まじども今殿一旦君臣の忠義に依て。身を不顧戰場に向ひ功労を尽し。亨武恩の報謝爰に畢ぬ是正成ゝ文中に諫誘をる言の如し。傳聞正成い天下の良將子路ゞ勇あ〻て子房ゝ智を備へ〻と称す。此事よも偽を以て殿を誘ふ〻てもあるべ〻速に許諾し給ふべ〻。當時の災害を遁れ。當家の面目を施す。是全く正成ゝ心にいつゝ偏に天の幽助しるゝ所耶。早領掌せ給へ。外あるべ〻と申ゝる。諸率皆此義に同じ。ゝる間。不及反牒領掌の趣彼僧に云含めて帰し。正成仕済し給へと悦び。急き使を京都に立て此旨を奏し。宇都宮ゞ綸旨を申下し。是を中院定平朝臣の手ゝを以て公綱ゞ方へ送らるゝ。公綱大喜び。子細を紀清両黨七百余騎を率して上雒し。其余南都に留る鎌倉の輩大ゝ力を失ひ。日來の義勢尽果てのつゝ小水の奥乃涸ゝ吻ぐ有様にて徒に日を送る間。百騎二百騎五騎十騎皆ぬけ

南都を落て。我先よと降参しくゝ仍て。今平氏の一族宗徒譜代恩顧の輩ども落留て。三十余騎東大寺より立籠る。宗平朝臣是とも責んと宣ひくるを。正成是程よく成めり上ハ人を殺して何ようはせん。其謀って見ひべしとて。七種三箇の酒肴を調へ古の朋友なれべとて。二階堂道蘊う方へ送りて申遣ハくゝ様ハ。貴辺の御運も今ハ扨てそと存じ侍りひ間御酒一つ可参りて候。舊きを御好忘きひらぐ。御痛ハくゝこそ存ひ正成近年鎌倉の人々に向ひて弓を引しを。神懸て私の遺恨なり。唯君の仰を重く存てこそ斯ハ侍りつる。定て両日の程に合戦あるべし。鎌倉のさま相州禅門の御自害并に一門達不残生害あり上ハ。世ハ昊まぬと可思召存ひ大君も入道こそあまた一門乃輩させる不義なり。最不便なりと綸言ありしなり。西園寺殿其外諸郷の御物語承て侍るなり。既に大君如斯の思召あるに依て。此度の軍御方勝利を得ようも必ずあるべ沙汰すべきの綸言なり。故に合戦を今日まで延引せられ侍り。旁以て恐多き申事なり。密に中院殿へ御内意被在侍きとうゝと存ひ。数代の名家此時ゝも悉く断絶おんを。如何可歎哀ひなどや。但某ぶかく申しるるまどあるべきに人に洩ゝるべきと。口をかゝあく申遣しくるまゝ。道蘊実もとあるひて。此由を諸大将に談じくるに。良徒残兵皆億病の心付て。唯中院殿へ被仰入候へと口々に申くるゝ。阿曽弾正時治より少しの縁のありくるまゝ。内々諸大将の思ふ子細を申入らるゝに。中院定平朝臣降人の形にて在せんより外に何事の御返答も不可申入候とありて。外に御返事もなくくり。去べとて各打死して名を後代に可残所存も今ハ是なく。責ての業の浅猿さに。阿曽弾正少弼時治大佛右馬助貞直ハ江馬遠江守篤時佐介安勢守時俊を始として。宗徒の平氏十三人并に長崎四郎左衛門泰光階堂出羽入道道蘊已下関東權勢の侍五十余人般若寺にて各入道出

家〻て律僧の形よりり。三衣を肩よりけ一鉢を手よ提て。降人よ成てぞ出
〻〻る

鎌倉降参諸将被誅　工藤左衛門述懐舊

中院宰相朝臣降人を請取く。高手小手よ誡め。傳馬の鞍坪よ縛て屈めて。
敷万の宦軍の前々を追立さ廿。白昼よ京へぞ被帰りる。平治ゝの悪源太
義平平家よ被生捕て首を被刎元暦ゝの内大臣宗盛公源氏よ被囚ゝ
大路を被渡こまれ皆戦ひよ臨む日。或ひハ敵よ被欺又ハ自害よ無隙して。
心ゝ〻敵の手よ懸ぬ。をゝる。今よ至るまで人口の嘲ゝとゝ成て。両家の末
流是を聞時面を百年の後よ令辱。況乎是ハ敵よ被欺ゝるもあゝ。
又自害よ隙ゝるよも非ず。勢ひのまゝ尽ざる先よ自黒衣の身と成て。
通き命を捨兼て縄細面縛せゝまて。雒中へ上る有様前代未聞の恥辱
なり。かゝて囚人京都へ着ゝまゝ。皆黒衣を脱せ法名を元の名よ改て入ゝ

大名よ預ゝる。其秋刑を待程よ。禁錮の裏よ起伏て。ありひ連め孔
浮世の中。涙の落ぬ隙もなり。さゝるゝぬ便よ付て鎌倉の有様を聞ば。
偕者の扰の上よ契を成し女房も。むくつけ気なる田舎人よ被奪て王昭
君ゞ恨を貽し。富貴の臺の中よ冊ゝる賢息も傍ゝへぐも寄ゝゝし。凡
下の奴と成て黄頭郎ゞ夢をなせり。是等ハせめて憂ゝ支ゝるゝもの
命あゝと聞ば。猶もあるひの数ゝる〻ゝ。夫よ替ゝて昨日ゝ岐を過ぎ今
日門よ入むて食を乞し。行客の女ある哀まゝや道路よ袖を廣げて倒れ
死せしハ誰ゞ母也短褐よ貌を窶て縁を尋ゝ〻旅人の被捕て殺害せ
ら邑い何某ゞ父也と。風よ語ゝを聞時ハ今まで生ゝる我身を憂と
ぞ更よ誣ゝれゝる七月九日阿曽弾正少弼大佛右馬助佐介安嬰る
江馬遠江守并長崎四良左衛門彼此十五人阿弥陀峯よて被誅ゝり。此
君重祢の後諸支の政未被行已前よ刑罰を專ふせゝん支ハ非仁政と

て潜に是を被切しるべ。首を被渡すべの支に不及面々の戸牓便宜の寺々に被送。後世善提をぞ被弔ける。其中に二階堂出羽入道は朝敵の最一武家の輔佐しるべども。賢き誓を兼てより聞に達しるべ召仕るべしとて。死罪一等を許さるべ。懸命の地に安堵して居さりけるが何者ぞ出しるべ。又隠謀の企あるよしを沙汰あるべ。同年秋の季に終に死刑に被行てるべ。又佐介左京亮貞俊は平氏の門葉なる上武略も能ともに兼しるべ。定て金剛山の寄手一方の大将にもと身を高く思ひるべ。相模入道左遷に賞翫もせざりるべ。眼を含て憤りを抱て無念るべ。寄手の中に在るべ。千種頭中将綸旨を申典て御方に可奉由被仰るれば去る五月の初に降参して。京都へ上りける。然るに此度平氏の一族皆出家して囚人に成て後は武家被官の輩悉く所領を被召上宿所を被追拂て。僅に身一つを措かるべ所々に

落る者あれば又は心よわめえさる配所の月に漂泊るもあり。貞俊も阿波の國へ被流て。今は召仕ふ若黨中間も身に不傍。昨日の楽しみ今日の悲しみと成て。益く心を責られる。盛者必衰の理の中に在るべ。今更世の中の無情を覚えて。如何るべ山の奥にも身を隠さんやと思ふ中にも。さて鎌倉の様何とか成べしんと尋問に。相模入道殿と始めて。一族以下一人も不残皆被討ぬ。妻子後類も共に行方を不知成ぬと聞えるべ。今は誰を憑て何を可待世にも不覚見に付聞に随て。いとく心を摧き膽を消ける処に。関東奉公の輩は旦命を扶るべ為に。降人に雖出遂るは如何るべ野心を起さむも計がるべ。悉く可被誅に定てるべ。貞俊も亦被召捕てるべ。挺も心を留むる浮世なれば命を惜るもあるべ。故郷に残せし妻子の行末何とも聞で死るべ。餘ては心よかるべ。最後の十念を勧むる聖に付て。年来身を放さざりける腰の刀を預て人の許へ乞

出して故郷の妻子の許へぞ送つるる。聖是を請取て。其行末を可尋申と
領状しくまぶ。貞俊無限喜びて。敷皮の上に居直て。一首の歌を詠し十念
高らかに唱て。閑に首をぞ打せける。其辭世の和歌に

皆人の世にあるる時を敷なしぐ憂にいとまぬ我身なりけり

聖形見の刀と。貞俊が最期の時に着たりける。小袖とを持て急ぎ鎌倉
へ下つて。彼女房と彼此尋ねて是を與へくまぶ。其妻聞もあへぬ。唯涙の床に
臥沈こそ。悲しけれ堪かねる気色に見えたりぶ。側なる硯を引寄て形
見の小袖の褄に

たまに見ると信を人の留めなむ堪へぬ命なりけり

と書付其小袖を引被き。其刀を胸に突立て。忽ちに成はてぬ。此
外借老の契空しくして。夫に別れて妻室は。苟も二夫に嫁せんことを悲し
こそ。深き淵瀬に身を投て口養の資なくして子に後れたる老母は僅に一日の
餐を求めかねて。自溝壑に倒れ臥。承久より以來。平氏世を執て九代暦
數已に百六十余年に及びぬれば。一類天下にもてはやされて。威を振ひ勢ひを專
にせし所々の探題國々の守護其名を挙て天下にあるる者已に八百人に
餘れり。況や其家々の良役なる者。幾千万と云數を不知。去ば縦ひ六波羅
にたやすく被責落とも。鎌倉と気脉を通ぜば十年廿年にも被退治事最
難しとこそ覚えしに。六十餘州悉く身を合せしに如く。同時に軍起て纔に
四十三日の中に皆滅びぬる。業報の程こそ不思議なれ。愚哉関東の勇士久
しく天下を保ち。威を遍く海内に覆ひしかども。國を治むる心なかりしこそ。
堅甲利兵徒らに楚の為に被摧て。滅亡と瞬目の中に得たる夏実なる
驕る者は失し。倹なる者は存を。古より今に至るまで如是。此裏ふ向
て頭を回を輩。天道は盈るを缺き謙を不知して。猶人欲の厭ふことなき溺
豈可不慎乎。爰に藤左衛門入道と云者あり。関東随分の被官なりしが一家

時を得て其名天下に隠なし。去程に鎌倉の政道不義の二日々被行ければ世の危ふさ支を悲こそ時々諫言を奉れども。高時入道遂に承引なかりければ。世の中扨こそ時を弁て出家遁世の身となりて。高野山に閑竜を再び人間に出ドと誓ひしかども。鎌倉の夏さそぐに耳に觸心を動を支多かりければ。今一度関東の有様をも見聞せばやとものひ成て。高野山を立出ては宿坊の柱に故里に着て帰るこそ悲しけれ錦に あるの墨の衣を

なるん書付く。鎌倉に赴き彼此の焼跡どもを見廻るに。御屋形の舊跡いつしか春の草茫々として。孤狸の棲となりぬるぞ。左衛門入道も分行袖を忘がりかの懐舊の涙も争ふ計てるりしうに思ひ分ぬ心の中ふ

故里のむかしを見ぞ忘草の原にや思ひ出きは

と口吟して歎息其より山の奥を尋の深より深き道に入終に散聖の道人と成て生涯を送てこそ哀なれ。

天下政道帰公家　護良親王任将軍入雒陽

先帝重祚の後正慶の年號は廃帝の院光厳改元なりぬとぞ。こそ被乗之本の元弘に帰さる。其二年の夏の頃天下一時に平定して。賞罰法令悉く公家一統の政に出しかば。群俗帰風して披霜春の日に照とぐ。中華懼軌を及を履て雷霆を戴如し。同年六月大塔宮大和志貴の毘沙門堂に御座有と聞えしが。畿内近國の勢は申に不及して。京中遠國の兵すべも人に先よと馳参て久る間。其勢頗る天下の大半を尽しぬんと覇し。宮既に同月十三日御入雒あるべしと被定ければ。其支度に御延引有て如斯諸國の兵を召集て作楯砦鏃合戦の御用意ありと聞えしかば誰か身上とおもうる。京中の武士の心の中更に穏うるぐに。依之主上右大辨宰相清忠を勅使として被仰ければ。天下已に鎮て七徳之餘威を偃しぬ。九功之大化を成處に猶干戈

天下政道
公家ふ帰して
護良親王
征夷大将軍ふ
任じ

を動し士卒を被集之條。其要何哀ぞや。況ん四海騒乱の程は敵の難を
遁んとも。一旦其容を雖被替俗體世已に静謐の上は急ぎ剃髪染衣の
身に帰て門跡相兼の業を事とすべきにこそ。宮清忠を御前
近く召て勅答申させうひとくに。今四海一時に定て万民孟夏の化に誇る
を陛下休明の徳に帰し微臣籌策の功に由然るに足利治部大輔高氏
僅に一戦の功を以て其志を万人の上に立んと欲す。今若其勢ひ微なるに
乗じて不討之。高時が逆悪を取て高氏が勢ひの上に加へるものなるべし是
故に兵を挙武を備ふる更全く臣が罪にあらず。況や剃髪の事兆前に撓を
不顧者定て舌を翻んぬ。今逆徒不測に滅びて天下無為に属ぬるとも奥
黨猶身を隠し隙を伺ひ不待時にして変あるべき此時上無威厳に下
必ず暴慢の心あるべし。さるべき文武の二道同く立て可治今の世也。我若
染衣の體に成て。虎賁猛将の威を捨たんには武よりあのそ朝家を全せん
人誰哉。夫諸佛菩薩利生方便を垂日構受折伏の二門あり。其構受
とは果和忍辱の貌を作て慈悲を先とし折伏とは大勢忿怒の形を現し
刑罰を宗とす。況や聖明の君賢佐武備の才を求る時。或は出塵の輩を
俗體に成し。又は退體の主を帝位に奉即る。和漢其例多し。漢土の賈
島浪仙は釈門より出て朝庭の臣となり我朝の天武孝謙は法體を替て重
祚の位に登る。抑我台嶺の幽渓に住て。絶て二門跡を守ると幕府の上将
に居て遠く一天下を静ると國家の用何を吾とせん。此両篇速に勅許
を被下候様奏聞を経べしと仰せられて。則清忠をそ被返る。清忠の卿帰
参して此由を奏聞あり。主上昊に聞召て大樹の位に居て武備の守を
全せんと。実も為朝家人の嘲を忘まじくに似たり。高氏誅罰の事彼
が不忠何哀ぞや。太平の後天下の士卒猶恐怪の心を抱く若罪うまじき罰
を行ば諸卒豈安堵のあらひを成んや。然るに大樹の任にあのそ子細

有べからざる。高氏誅罰の支よ至てら堅く其企を留むべ〻〻。聖断有て
征夷大将軍の宣旨を被成るる因之宮の御憤つゝも少〻〻散ド
るるるや。六月十七日志貴を御立有て八幡よ七日御逗留まする
同廿三日御入雒あり。其行列行装天下の壮観を尽せり先一番ふい赤
松入道円心千余騎まて前陣を仕る。二番まゝ殿法印良忠七百余騎三
番ハ四条少将隆資五百余騎。四番まゝ中院中将貞平八百余騎其次〻〻
花やまよ鎧ふるう兵五百人勝つて帯刀まて二行よ被歩其次よ宮赤地の
錦の直垂、火威の鎧の裾金物よ杜冊の陰よ獅子の戯て前後左右よ追
合まゝと草摺長よ被召兵庫鐐の丸鞘の太刀よ虎の皮の尻鞘かけまゝ
太刀懸の半よ結てさゝげ。白篦よ節陰まゝ少〻塗て。鵠の羽を以て矧
まゝ征矢の三十六指まゝと箭高く負なり。二所藤の弓の白銀の法〻
打まゝを十文字よ拳て。白瓦毛まる馬の尾髪飽まで足て太く逞きまる
沃懸地の鞍置て。厚總の鞦の唯今深出〻〻まる如〻〻と芝打長
よ懸まる。侍十二人よ雙口とまゝ〻せ。千鳥足を踏せ〻小路を按〻と被
歩後乗まる千種頭中将忠顕朝臣千余騎まて供奉せ〻〻上。猶
も御用心の最中まれば御心安き兵を以く非常を可被誡とて國〻
の兵てば。混物昊まて三千余騎閑〻小路を打せる。其後陣まゝ湯浅
權太夫某。山本四郎二郎忠行伊東三郎行高。加藤太郎光直。幾内近国
の勢打込まよ二十万七千余騎。三日支へ〻ぞ打まゝる。時移り変て。
萬ぜ昔まゝ替る世まれども天台座主将軍の宣旨を蒙て。甲冑を帯し
随兵を呂昊〻御入洛あり。右様ハ珍〻かし壮観なり

○抑宮何故高氏を斯まで悪ませうふとのまる其謂あり。
宮の御母堂三位殿の御局高氏を恨まうふ変のあり。宮も
高氏上洛〻我在所も近きまるれを悩さ。遠き舟上直奏

して綸旨を申下さを条御悪しこの一ッ。又諸将事こゝろせて宮へ使者を奈らをそゝをあまこゝびなまごゝも高氏八度も使をまのゝもゝそゝる。剰へ宮の良後高氏の陳前を乗打〳〵ゝゝを攻めて。散々に打擲〳〵宮の良後ゝる面名乗ゝゝゝ驚き暗不知〳〵て追放ッ。此良後ロを〳〵思て事の子細を書残〳〵腹掻切て死〳〵てゝゝり。宮此由聞召て御憤つと強ゝまでゝも。其侭よりゝあゝる是御悪しこの二ッ。六波羅滅亡の後。先帝御還幸までの間。京都物騒こゝそ。高氏諸事の政務を沙汰〳〵威を震ひゝまでゝ。滝口の諸軍皆高氏が命を重ゞと。宮の御心〳〵吾隣國よりのゝゝゝまゝべ早く六波羅滅亡の赴きを注進〳〵。吾を京都へ迎へて諸事の政務を議るべきゝよ其夏ゝ〳〵慾に自ら政夏を執行ふこと案をゝゝよ奥深き野心あんゝゝゝぶゝゝゝせゝゝゝ。是御悪しこの三ッ。因茲ひそゝよ殿法印良忠に仰在ゝ。京都の諸夏を伺ひ速に告知をべきよゝゝと命じゝゝ。良忠も高氏がありさまを腹悪くあるの折柄なれば。幸の夏ゝりゝそ。高氏が政道を妨げ其下知を不用宮の御代官と称〳〵。別て法令を立てゝゝれと沙汰〳〵ゝゝよ。高氏もまゝ是を破ゝて不用。互に擯を報威を争ふ。中にも四条室町ハ良忠が手の者の宿所ゝりゝゝを高氏が家人高左兵門師直が手の者に奥田吉次とゝゝ者去子細あゝ〳〵京中強々の沙汰に廻ゝり良忠が宿所近く來ゝゝゝそ。良忠が手の者ども無礼の奴原ゝみゝて悉く捕取吉次を始め十二人の首を刎て京中を引渡〳〵。是利治部の大輔高氏が家人高左兵門が良後

強盗を仕ル間、令誅所なりと札を書させ、雑色も觸させ
ければ、高氏世を口惜くおもひ、己が良忠と合戦に及ぶべ
存ぜらるるなり。日ごろ良忠が手の者三条油小路
て溢れ廻り富家の土蔵を狼藉して金銭を奪ひ取るを、高
氏が手の者これを召捕二十四人六条河原すて首を刎ねる
の木に懸て札を立る。大塔宮の候人殿法印良忠が手の者昼
盗仕るに因て、為法令所刑罰也とぞ云ひ〻る。良忠無念
に思ふとのべども可成様なりければ、急ぎ此旨を宮の方へ
申贈られけるに、宮ハ此時加名生の奥観心寺よりかくぶ
此由聞召て宣ふ様、下賤の咎人の札に我名を顕さる言語
道断無礼至極せり。其上禁札の昏やく古今定る所なるを
法に不随我執事の手の者なりと昏〻なる度甚以て奇

怪なり。一戦の功に奢て我を嘲て剰へ御ものゝ〻まで
帝都の法禁を沙汰なる条、前代未聞其例なり。諸國の
軍勢此者に随ひ附の条唯事にあらず。今誅せずんば後の
禍ひ如指掌なるべし。然らば早く軍勢を集むべしと下知
なりければ、楠正成遥に傳承て急ぎ加名生に参て
諫め申さるる様ハ、思召の所其謂なきに不待候
へども今千破早の寄手のまぐさ南都に屯して不退鎌倉の
軍も其左右不分明にて候へば、一人にても味方を失ふ間
ぶさ時節にて御座ハ差當てハ朝敵を御退治なる高氏
誅伐〻〻なんら大事の前の小事にすべし。高時入道が一類
亡びハ上ら免も角も思召の侭に御代ハ成行べき様々
に宥め申さるるべ。宮御憤て深〻とのべる。高氏誅罰

の叓暫く延引に及びける。是高氏を悪しとの四ツなり。今鎌倉亡びぬる上へと思召て志貴に御座所を移させ給ひ已前思召立のごとく軍勢を驅催し給ひけるなり。高氏は此頃までは何心なく侍りけるが。宮の思召を聞しりけるより頼事にあらぬひ。斯悪まれ奉りては終に我家も亡びなんと舎弟直義と明くれ密に謀事を談じ終に宮をも失ひ奉りて世をも奪ひとらんと思ひたち申させけるとかや。是宮の御心余りに猛く寛仁の恩遠なきによれるとの兇悪にも悪を重ね給ひて悪心ある者に悪心を付るとも加様の事を申なすなるべし

配流月卿歸華雒　藤房稱病辞奉行

去る元弘三年流刑にあへる方々妙法院宮は四國の勢を召具せられて讃岐の

國より御上洛あり。萬里小路中納言藤房卿は預人小田民部大夫相具して上洛せらる。其舎弟春宮大進季房は已に配所にて身罷申されけるまでぞ。父宣房卿は悦の中の悲しとて老後の泪袖に満てせきあへず。法勝寺の圓観上人は預人結城上野判官時重入道具足し奉りて上洛しければ君法體の無恙を御悦のあまり。聽て結城入道に本領安堵の綸旨を被成下けるが。其余文観上人は硫黄島より上洛し。忠圓僧正は越後の国より帰洛せられける。惣て此君笠置へ落させ給ひし刻に。解官停任せられし人々。死刑流刑に逢る其子孫此彼より召出され一時蟄懐を開きたりける。夫に引替日來武威に誇て本所を無する權門高家の武士のつしる諸庭の奉公人となり。或ひは軽軒香車の後へに走り。或は青侍格勤の前に跪く。時世の盛衰轉変歎くに甲斐なき習ひなり。今の如く公家一統の世ならば諸國の地頭御家人は皆奴婢雑人と成果べし。哀を何ろ

不思議も出來て。武家四海の權を執世の中は帰きうしと思ふ人の多うりう。同年八月三日より諸軍の恩賞の沙汰あるべしとて。院方赤門督實世卿を上卿に定めらる因茲諸國の軍勢皆軍忠の支證を立申狀を捧て恩賞を望む輩何千万人といふ數をあらぶ。實有忠者も憑功不諛無忠者は媚奥求竈て上聞を掠めり間。數月の中僅に廿四人の恩賞を沙汰せられしまでも。前文の如く奥に媚て賄賂し竈に求めて新恩に預てりし程に。事正路にあらずとて前日被成下しる御教書も後日に召返され。昨日賜はりしる所領も取返さるべし。京中の滞留の諸軍此彼に互に非分の事を語て合て。物騒しくぞ見えしける。左あらん上卿を改めらるとて中納言藤房卿を上卿に被成實世卿より申狀を被附渡藤房請取之明らに忠否を糺し浅深を分ちて各恩賞を申典ん所ひろひろ處に。如何内奏の秘計に依て

唯今まで朝敵にて有つる者も安堵を賜り。更に無忠功輩ふも五箇所十箇所の所領を給ひしる間藤房卿案に相違し種々諫言を奉り申されしまでも。主上更に御用ひなかりしる程に。今は藤房卿も諫を納かねて。称病して恩賞の奉行を辞し申さるべく。角く黙止べきにあらずとて。九条民部卿光經卿を上卿に定めて御沙汰ありしる間。光經諸大將に其手の忠否を委しく尋ね究めて申典ふべしとあひ給ひしる處に。相摸入道の一跡をば内裏の供御料所に被置高時の舎弟卯左近大夫入道の跡をば兵部卿親王へ被進大佛陸奥守の跡をば准后の御領に被成しる。此外相州の一族関東家風の輩ども所領をば。郢曲妓女蹴鞠伎藝の者共又は衛府諸司官女官僧等。差功ありし輩に一跡二跡宛て内奏より申賜はるべし。今は日本六十六箇国の内に錐を立の地も諸軍に可行賞所はあらじ。斯に一人光經卿も心計は無偏の恩化

を申沙汰せんと欲しうひろまどる。其事はなはだ空しく年月をぞ被送
ける。又雑訴の沙汰の為よりて。都芳門の左右の服し決断所を被造ける。
其議定の人数は才学優長の卿相雲客紀傳明法外記官人を三番に
分て。一月に六箇度の沙汰の日をぞ被定ける。凡叉の體厳重に見えて堂
々しうとのべども。是尚理世安国の政にあらざりけり。或は同巻より訴人
勅許を蒙るべき。決断所にて叉を非として論人に理を付決断所にて本主
に安堵を與ふまじき内巻より理を非に落して別人の恩賞に行なる。如此
互に錯乱せし間。一箇處の所領を両三人の賜主互に爭論し国々の動乱更
にをさまらざる。然るに去る七月の初より中宮御心地煩ひ給ひけるに。
八月二日に隠れさせ給ひ叉のこと有るべ。十一月三日春宮まさに崩御なり
ぬるまでに。是唯叉に亡率怨霊の所為なるべしとて其怨害を止め為今
趣善所東大與福延暦園城四箇の大寺に仰せて大蔵経五千三百巻を一日
の中に書寫させ法勝寺に則ち供養を遂らるる。斯程に諸軍
恩賞の沙汰弥以て延引せしかば。恨を含む者多かりけり
藤房卿は賢才の君子にて故実に恩賞の理非
厳重なるべしとのひて。無功輩不忠の者にも内縁賄賂
を憑とて。所領を申下しける。藤房其虚実を正し是を
沙汰せらるるに。伊豫国の住人村上三郎春季同巻を以
て軍忠あるを申挙ける。藤房土居得能を召もて。実否
を尋申さるるに。春季叉河野通治に属し六波羅に
上て。官軍に敵対したる。北条仲時時益六波羅落去の刻に
本国に北下つて河野が家人を少々責伏しこれを軍忠と申
候趣き土居得能明らかに申伸さるべし。藤房遂に聞き
とり叛逆降参不義の者なり。六波羅いまだ亡びざる已前の

降人より侍らば本領安堵然るべし。已て六波羅滅亡已後の降人なれば本領を没収し新恩あるべきなどと沙汰し申されるを。民部卿の局頻りに執成申さるゝに因て春季二箇所の新恩納米二千余貫を賜りぬ。其外藤房忠なき者に恩を不施朝敵と成たる輩の所領を没収せられぬ。これ等の輩内奏の秘計准后の御口入を以て君より直に本領を安堵し。五ケ所十箇所の所領を被成下ぬるに依て。藤房卿今の世の中なるべしと。則ち病と称して上郷を辞奉行を退き申さまほしけれと云々

造營大内裏拯結構　附營神辨因意始末

翌年正月十二日諸卿議奏て曰。帝王の業萬機事繁ふして百司位を誤る。今の鳳凰僅に方四町の一町に被廣建殿造宮しめらるべき議せられぬるに是猶古の皇居に及ぬ。大内裏を可被造と云安藝周防を料国に被寄。紙銭を造て通用し。日本国の地頭御家人の所領の得分廿分一を懸られぬる。抑大内裏と申は秦の始皇帝関中の都咸陽宮の一殿を摸して造る所なり。嵯峨天皇弘仁九年始て造營有なり。南北三十六町東西二十町の外詔尾の置石を居て四方に十二の門を被立なり。東に陽明待賢郁芳門南に美福朱雀皇嘉門西に談天藻壁殷富門北に安嘉偉鑒達智門此外上東上西二門に至るまで。交戟の衛伍を守て長時に非常を誡めなり。三十六の後宮にも三千の叔女妝を飾り七十二の前殿に文武の百司詔を待。紫震殿の東に清涼殿あり。西に温明殿あり。北に常寧殿あり。貞観殿と申は后町の北の御旋殿なり。校書殿と号せしは清涼殿の南の弓場殿也。

昭陽舎は梨壺。淑景舎は桐壺。飛香舎は藤壺。凝花舎は坪。麗芳舎は雷陣壺也。萩戸陣座滝口戸鳥曹司縫殿兵衛陣。左は宣陽門右は陰明門也。日花月花の西門は陣座の左右より対へり大極殿小安殿蒼龍楼白虎楼豊楽院清署堂。大嘗會五節宴は此所にして被行中和院は中院内教坊は雅楽所也。御所法は真言院神今食は神嘉殿。真弓競馬武徳殿すべて被御覧。朝堂院と申は八省の諸寮是也。右近陣の橘も昔を忘れぬ香を留め。御階より滋る竹の臺も。幾世の霜を重ねぬ。在原中将の弓胡籙を身より添て。雷鳴さらぐ終夜。あぐらなる屋ふ居〻〻は官の廳の八神殿。光源氏大将の如物かたり詠じつ。朧月夜より鞠〻は弘徽殿の細殿。江相公の古へ越国へ下りしより。旅の別を悲しこと。後會期遥也濡纓於鳴臚之暁涙と。長篇の序より書〻る。羅城門の南なる鳴臚館の名残なり。鬼間直盧鈴の繩荒海の障子と清涼殿より被立さる。賢聖の障子と紫震殿にして被立なる。東の一の間は馬周。房玄齢。杜如晦。魏徵。二の間は諸葛亮。遼伯玉。張子房。第五倫三の間は管仲。鄧禹。子産。蕭何。四の間は伊尹。傅悦。太公望。仲山甫。西の一の間は李勣。虞世南。杜預。張卒。二の間は羊祜。楊雄。陳寔。班固。三の間は垣栄。鄭去襪。武倪。寛四の間は董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通也。畫図は巨勢金岡が筆。賛の詞は小野道風が書。殿舎門々の額は空海大徳書〻申さるる。鳳凰翔天虹梁聳雲さ〻もいとにく造て雙べらるる〻〻。大内裏天災消は無便回禄度〻〻に及びく今は昔の礎のこ残てなるなと。此度再造すべきの事以の外の一大事なり。其回禄の由を尋めるに唐堯虞舜の君は支那四百余州の主として。其徳天地に應ぜ〻うど。茅茨不剪柴禄不削とこそ申傳へるなれ。知や栗散国日本の主〻て此大内裡を被造ることは其徳相應さぞ〻〻。後王若無徳なりしも其居を安ずるしめむと欲して斯造らせうふ〻のなりしも。

国の財力依之尽べし。空海鞏之門々の額を書せうひろうゑ。大極殿の大の中を引加く火の字〻〻朱雀門の朱の字を米とゝふ字に書せうひけろ。空海深き意を以て大内裡造営の事を諫めうひしうゞ。天皇用ひうゑうゑうゑまゞ。力及ばゞ心を尽し斯ハ書せうひろゑ。小野道風是を遜申けまゞ。其後よう道風執筆手戦ひ正し〻文字を書得ざりろ。然まゞ天性草書妙し得ろ人うれゞ。手を戦ふ〻書ろ〻〻聽〻筆執し〻ゞ成〻ろ是よりして。人道風の揮筆とハ賞し〻ろ。空海かく書せうひろゑ。窮民の財力を費し〻ろものかまゞ。人〻かゞして天に帰よ。ろうゞゞこの思食やあり〻ん。後果して大極殿より火出て詣司八省残る所すく〻上よ及びろ。今まゞ是を造り〻〻ゞ。前車覆て後車の誡を志〻ゞ〻〻や申ゞ〻

○大内裡〻上の後無程御造営あり〻まゞゞ北野天神の御眷属火雷気毒神清涼殿の坤柱よ落懸つゝみひし時再び焼亡ろ〻〻ろ〻ゞ承ろ。抑天満大自在天神と申奉ろ人凡月の李主文道の大祖さう。佛道〻〻〻十一面観自在菩薩の権化と称し。天〻御座てゝ日月と光を顕し〻て国土を照し地よ降下てゝ盧梅の臣と成て群生を利〻ゝ其始を申せゞ菅原宰相是善卿の南庭〻五六歳たゝりろ小児の容顔清らろろ前栽の梅花を詠め〻唯一人立ろ菅宰相怪〻〻と見うひ。君ハ何をの人雅家の児〻て御座そと問うゝゝ我ハ無父無母願〻ハ相ゝと親〻せんとちゝひ侍べと答へさせうひゝまゞ。菅宰相嬉〻と思召て手ばゝ〻早き懐き奉て鶯鶯の衾の下〻恩愛の養育を事と御名を三〻ゞ申〻ろ未習し〻て凡月の道〻賢く御才学世〻類ひ

あしと見えうひ〳〵しう六十一歳ゟ成せるひ〳〵時御父菅
宰相御髪を搔撫て若詩や作てうつくしと問せうひ
くれた少も案じうゟ御気色もなく
月耀如晴雪　梅花似照星　可憐金鏡轉
庭上玉芳馨　と寒夜の即事を五言の絶句にてぞ作せ
うひける。其後詩ハ盛唐の波瀾と搖て七歩の才ゟ先ざち
文ハ漢魏の芳潤ゟ嗽ぎて萬巻の昏を諳うひ真観十
二年三月廿三日對策及第て自詞場に桂と折ふ自慢て
菅少将道真朝臣とぞ申ける。其年の春都良香の家ゟ
人集て弓を射ける。菅少将も其所へちと〳〵まゐ都良
香心よちのまと々る様ハ此人ハ学窓ゟ無隙人なまと弓の本
末をも知ら〳〵的を射させて矣だやと思ひて的矢ゟ
を取副て御前ゟ罔さ。春の始ゟ一度被遊ひつとぞ被
請る。少将少〳〵も辞退〳〵ろ〳〵番の相手ゟ立合うひ
打上て引下をより暫く有ぐりて堅めうる體切て放ち
る矢色弦音弓倒〳〵まで吾善何をも遅〳〵勢ひあつて
矢所一すものうず。五度の十を仕うひ〳〵まゐ都良香感て堪
かねく御手を引て席ゟ清〳〵酒宴數刻ゟ及び様々の曳出
物を被進ける。同年二月廿六日延喜帝いまゞ春宮ゟて淑庭
ありうる〳〵菅少将を被召て漢朝の李嶠を夜ゟ百首の詩
を作るは汝盍如其才二時ゟ十首の詩を作る〳〵と
被仰下則ち十題を賜りて半時計ゟ十首の詩を作らせ給
ひける

送春不用動舟車　唯別殘鶯與落花

若使詔光知我意　今宵旅宿在詩家

曼暮春の詩よ（て）十首絶句の内ありとぞ承る

斯（か）るべ（き）賢才の誉仁義の道（に）て（も）無欠所君（は）三皇五帝の徳よ帰し。世（は）周公孔子の治よ均しきを唯此人（に）あり。

主上無限賞（し）思召（し）ま（す）。寛平九年六月中納言より大納言よ登（り）て（も）て大将よ成（り）ふ同年十月延喜帝御位り即（ち）ひ（き）後（は）萬機の政併て幕府の上相より出（し）ま（す）。摂禄の清華の家も可比肩人（な）し。昌泰二年の二月よ大臣の大将よ成せ（り）ふ。此時太院大臣時平公と申（し）大織冠九代の孫昭宣公基経の御男當今皇后の御兄村上天皇の御伯父也。摂家と云高貴と申（す）旁我（が）等き人あ（り）と思ひ（な）ひ（な）よ。官位賞禄菅公（に）よ被越（し）ひ（き）ま（す）御憤（り）更（に）無休時

因茲御身（に）近き月卿と相謀て陰陽頭を召て王城の八方（に）人形を埋て。冥衆を祭（り）て菅公を咒（し）ひけれ（ば）。天道私（な）き（が）ま（ま）御身（に）災ひ（な）し。扨（は）讒を構へて罪科（に）沈んとも（し）ひ（き）。妹の皇后及び身近き月卿をかゝ（し）ひ。菅公已（に）姫君と以て時世親王を誓（ひ）て間を窺ひ親王を御位（に）立る心あり。其上天下の政勢私有て民の愁をあ（ら）ば非と以て理（に）なし（て）よ。時（に）密奏被申（し）ま（す）。主上も始の程（は）菅公（に）於て尤様の志あ（り）ふ（と）被思召（し）ま（す）。内奏度かさなり其上皇后の御口入（に）被惑（し）ひ。扨（は）菅丞相世（を）乱し民（を）害（し）と逆臣（と）して非（を）諫め邪（を）禁（ず）る忠臣（を）ふ（と）被思召（し）ま（す）て悲（し）ま（す）。誰（か）知んや偽言の巧似簧（の）如く動君掩亀君莫掩使君夫婦為参商詰

君掇蜂君奠掇使君母子成犲狼とかや。さこそも可眤夫婦父子の中とてさこそ遠ざかるつゝ諍者の儀となり。況や君臣の間に於てをや。遂に昌泰四年正月二十日菅公太宰權帥に遷され筑紫へ赴きさうらへべきよ定まりさうらへば菅公御悲しさよ堪がたく一首の歌に千般のおもひを述て亭子院へ奉さうらへ

流れゆく我はこゝろづからなれども君ゆゑとこそ成てこゝろよ

法皇宇多帝大きに御驚あつて此歌を御覧じ御袖を濡し給て左遷の罪を宥めさせのわんとて御参内ありけれども御門々々と閉奉りて法皇を不奉入法皇も詮方なく御憤りを含て空しく還御成さうらへ。其後菅公已に筑紫へ被流さぬ

のゝ又中に四人の御男子も皆ひき分て四方の國々流し奉る北の方と第一の姫君をば都にとゞめまゐらせて

残る十八人の公君と同じく都を立離れて心ばせ〳〵に赴きうせさうらへ。御有様こそ痛間しけれ。年久しく住馴うらへし紅梅殿を立出させうらへば明方の月幽かにうち折忘れたる梅の香の御袖に余りてこゝろも見や古郷の春の形見と思召し御涙さへ留らぬ

東風ふかば匂ひをこせ梅の花主なしとて春な忘れそ

と打詠じうらひて。今夜渡の渡りまでと追立の官人共に道をいそぐ程御車にぞ被召けゝる。実や心なき草木も別るゝと悲しきこゝろかな。東風の便り得て此梅忽ち飛去て配所の庭にぞ生さうらへる。今尚宰府御社の側にあつて飛梅と称するものなり。其夜は河内国土師里に古き伯母君の有けるに宿らせうらひ翌朝其家を立出させうらへとて御

名残を惜ませ給ひて

だこそ別まとつそげ鶏の音の聞えぬさこの暁もがな

此御歌より今も此里に鶏暁々声を発せばとこそ事覚

れ去る仁和の比讃州の任に下りうひ〳〵時に数多の月卿

雲客御餞別して見送る鮮甘寧錦纜蘭橈挂揖敲舷於

南海月。昌泰の今の配所に赴せ給ふ御別まを惜まそ見

送らせ給ふ人々藤原忠平公時平公御舎兄だうりそ其余一人も留

別の者いとりとり。御歎きの遣方なくて

あらまし我〳〵の友ぞうき人の情も世にあらばこそ

斯て恩賜の御衣の袖を波の上蓬の底に沉て。思ひを西府

の雲に傷しめ都に留置のひとり。北の方姫君の御事を

今は昨日を限りの別まと悲〳〵まくめ国々へ流し被遣た

る四人の御男子も左こそあるらめ旅に身を苦め心を悩ませ

らめと一方ならぬ思食に御泪更に乾く間もなくまび旅泊

の情を述させ給ふ

自従勅使駐将去　父子一時五處離

口不能言眼中血　俯仰天神與地祇

北の御方より被副々る侍士の道より帰るに御文あり

君が住宿の構をゆく〳〵も見まくまぞよりつて見しかな

心筑紫に波濤を凌ぎ。配所の西府に着せ給ふ埴生の小屋

のいぶせさに送て置奉りて。都の官人も帰つぬ都府楼

の瓦の色観音寺の鐘の声見に随ひ聞につけくの御悲しさ

此秋も獨我身の秋深く起臥露のそこに古郷を忍ぶ御

泪言の葉毎に繁くまびさくぞ重濡衣の袖に干まもなく

梅花下
神童
降臨之圖

まくり御徒然るまゝに配所にて遺せる御歌

海なくばたゝふる水の底までもきよき心を見てぞすまん

足引の山のそなたゝる道にあまたつゞく都へとつの人そなつかし

天のはらあるゝ出る光にはづるゝ沼のさゝ残るべき

宵のまゝ都の空よりとゝもせぬ心はくゝの有明の月

扨も無実の讒言にて配所に被遷恨のあまり骨髄に入て忍びがたく思召くまべ。七日の間御身を清めさせ給ひ。一巻の告文を作らせて高山に登り竹卒の前に挾て差挙七日御足を翹天に捧ゝ焚天帝釈も其無実を憐み其志にや感じ給ひ。黒雲一群空より下降て御告文を把て遥の天にぞ揚ぬる。其後延喜三年二月二十五日遂に左遷の恨に沈で薨逝しぬ。然る間今乃安楽寺に御墓所と定て送奉るに、惜哉北闕春花隨流不帰水奈何西府夜月入不晴虚名雲さゝてぞ貴賤涙に満て世の淳素の化に誘ひ墓ひ遠近声に呑ぎ道に流渦の俗に踊躍を悲しめり。同年夏の末に延暦寺第十三の座主法性坊尊意贈僧正四明山の上十乗の床の前に観月を照し。心水を清め御座に持仏堂の妻戸をわり〳〵敲き給ふに、押開て見ふに過ぬる春薨逝しぬと聞えし。菅亟相にてぞ御座ける。尊意奇哉思しに先此方へ御入ひしと誘引奉て。扨八御年八十二月二十五日薨逝して御隠まるひぬと惜よ羨りしより悲歎の涙を袖よりけに後生菩提の御追善の三申居ひよ少しも不替元の御形にて入御候と夢幼の間辨じがたくこそ覚

て候と被申候まゝ菅丞相御顔に破落々と盈る涙を押
拭ひ我朝庭の臣と成て天下を安らしめむとの暫く
人間に下生せし処に君本院大臣の讒言を御許容あつて。
終に無実の罪に被沈めし支嗔恚の焔劫火より盛なり。依
之五蘊の形を壊らしつゝも一霊の神は明らかにして天に登り
十六万八千の鬼神魔類の首領となる幸ひに今大小の神
祇梵天帝釈四王の行を得て深き怨を報ぜんとのみ我春
屬火雷気毒神を九重の帝闕に注ぐ。我に注ぐかし
佞臣讒者を一々に蹴殺さゝんと存ずるなり。其時定て
貴坊に仰て惣持の法験を致さるべきなり。猶ひ勅定有
といふとも必ず我を拒こゝろ〳〵相撞へく参内あるな
べし〳〵と被仰けまゝ尊意答へく被申様は貴方と愚僧

と師資の儀不浅とのゝしつゝも君と臣と上下の礼尚深〳〵率
土は皆王民なり勅請の旨一往は辞し可申ゆゝしつゝも再度に
及ぶ辞ろ参内仕らで候べきとおもひしに菅公の御気色
俄に損じ給ひて有る柘植を取て哺推き持仏堂
の妻戸に紙と吹懸させうひらまゝ忽ち猛火と成て妻戸
に烘付る尊意少しも不驚泥水の印を結び被申れば
猛火立処に消る妻戸は半焦くるる。此妻戸今に傳り
て山門に在とぞ承る去程に菅丞相は座席を立て天に
昇らせうふと見えしが雷電の上に鳴降り洪
天も地に落大地も裂るが如くなり。一人百官身を縮め
魂を消しうに七日七夜が間雨暴く風烈くして国中闇夜の
如し洪水俄に漲て家々を漂し京白河の貴賤男

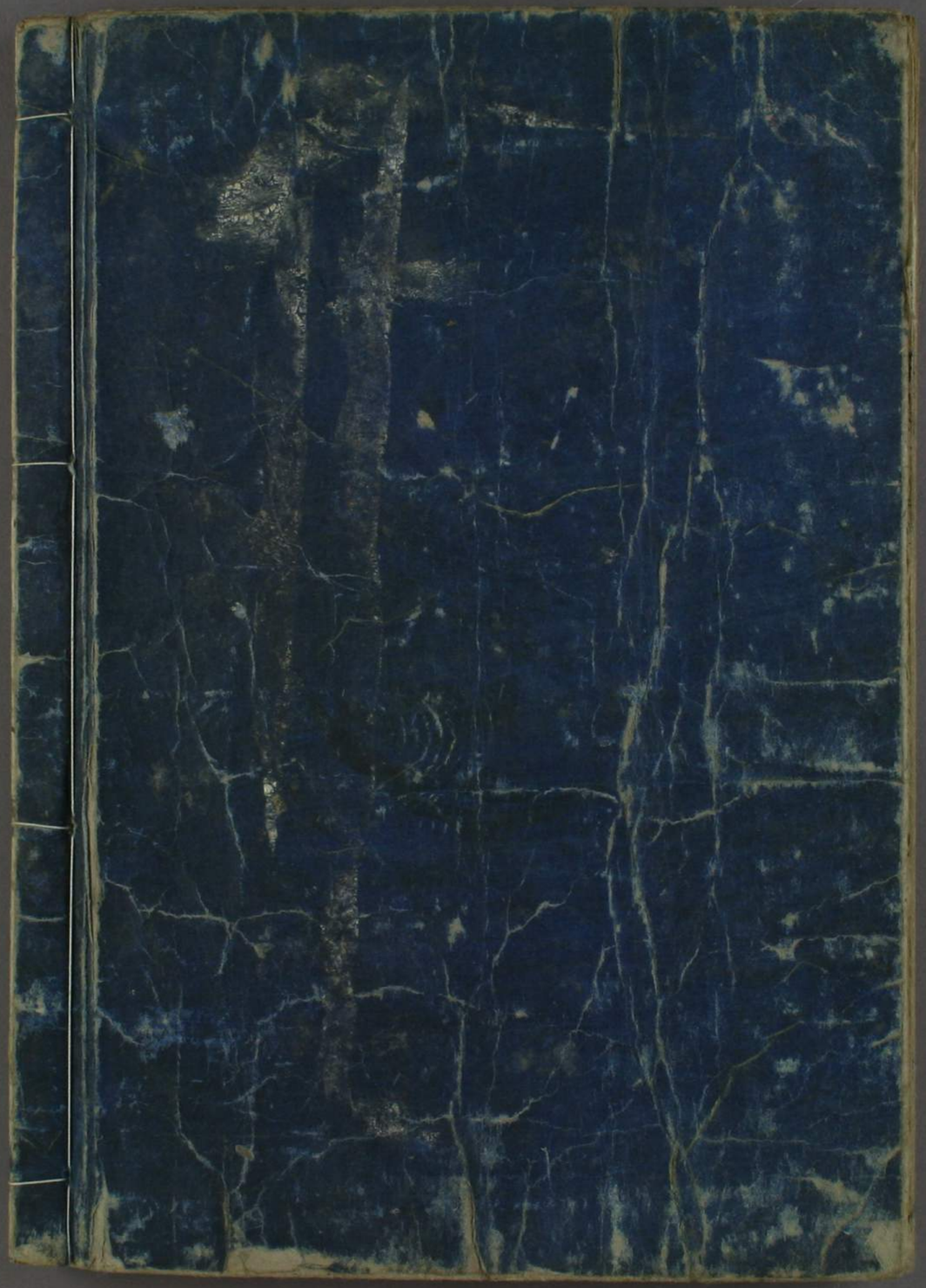
女歎き叫ぶ声叫喚大叫喚の苦こゝもかくやと計り彩し。
遂に迅雷大内の清涼殿に落て。大納言清貫卿の表の衣ふ
炎燃付て。伏轉べども不消して焦爛れてぞ悶絶す。右大辨希
世朝臣ハ心剛き人なりけるが。縱ひ何なる天雷なりとも王威
に不怖哉とて弓に矢を副て向ひ被申けるが五體ともくゞて
覆に倒るゝ。近衛忠包ハ髮髮し火燃付て即死せ〳〵
紀蔭連ハ煙に咽で絶入ぬ。本院大臣ハ菅丞相の御姿の
幻と見えけるが。もどろきあるや我身に懸る現罰とて被
思けるが。玉體に立副進らせ太刀を拔き大喜参朝に仕へ
うゝし時も礼義を少〳〵も乱ぬ。縱ひ今神となり
給ふとも。君臣上下の義を失ひうゝんや金輪くゝの高〳〵
擁護の神未捨給ぬ。靜て穏に德を施〳〵理に當て
宣ひけるまゝに理なりや。本院大臣も蹴殺され
ぬ。玉體も恙なくして雷神天に帰らせ給ひぬ。去ども
霖雨降続き。暴風波を揚ること尚不休。斯て世界国土皆
流れ失ぬべく見えけるに。法験を以て神の怒りを宥
申さんとて。法性坊尊意を被召る。両度迄ハ辭退
申けれども。勅宣三度に及びければ力なく下山して給
ひけるに。鴨川もびゝしく水増して舟なくて渡る道なきに
あり合ける。尊意唯此車水中を渡るべしと下知せける牛
飼命に隨ひ漲て流る河の中へ車を乘て曳入ければ満水忽
ち左右へ分て。却て車ハ陸地を行ぐ如くにして尊意参内し
ければ。雨止風ぞ吹ける。神の御怒も忽ちに宥まりぬ
と見えければ。尊意感に預て帰山しける。山門の効

験天下の称讃在之とぞ聞えしに、自是君も御悩とて、仙
洞、本院大臣も病を受て身心鎮へ難苦しかりしに、浄蔵貴所
を請じて加持せられまゐらせ、大臣の左右の耳より小さき青蛇
頭を差出して、浄蔵貴所に向ひ、我無実の讒に沈て恨を散
ぜん為に此大臣を取殺さんとの思ひ入なれば、祈療共に其
験あるべからず。斯の者を誰とかは知る、右大臣道真の変化
の神、昊天にして示顕ひろる。浄蔵貴所此不思議に
驚きて、加持を罷られぬ。本院大臣忽ち
薨去ましまひぬ。これ而已ならず、大臣の御妹の女御御甥
の春宮も聽て隠れ給ひぬ。大臣の資男八条大将保忠
卿三男中納言敦忠卿も重病に染て早世せられぬ。其人
々の子孫までも一時に亡びうせぬる神の御祟り
こそ恐しけれ。其頃主上の御従父兄弟に右大辨公忠と申
人悩む事なほ〳〵頓て絶入申されたりけるが、三日を経て蘇生
大息を吐いて急ぎ奏聞可申事ありと、我と扶起されて内
裡へ参られたりしが、其子信孝信明の二人父が左右の手を
扶て桑内被申たりける事の故何なる御尋ありけるに、公忠
冷汗を流して戦慄て奏せられけるは、臣かねがねも冥府の
廳へ赴きしに、其長一丈ばかりもあるべき人の衣冠正しく
きて、金軸の申文を捧て粟散邊地の主延喜帝王の大臣
時平が讒を信じ、罪なき臣を流刑せられしに、其不明
の誤り忘難し。早廳の鐵札に記されて、阿鼻焼熱の間へ
可被落と被申しが、三十四人居たる冥官大に怒て時刻
を不移其責に可及と同じくのたまひしかば、其席第二の冥官

若年号を改て過を謝する道あるべし如何せんと申さ
まるるまでに。座中皆猶預の躰に見えてひそまり。其後公忠卿生
仕候ことを被奏ける。君大に驚き思召て。扨い過し年よ
りの化異不思議は皆菅丞相の業にてありけるよし。
御過ちを御悔有てやがて延喜の年号を延長と改め。
速に菅丞相流罪の宣旨を焼弁。官位を元の右大臣に
復し。正二位の一階を被贈。菅公四人の御男子十八人の姫
君皆〻都に召還されける。其後程をすぐして朱雀院天慶
九年近江国比良の社の補宜壬生良種に菅公御神託
あつて。大内の北野に千本の松一夜に生ずべし。此所に我
社を建べしこの比良の山に此由巻尋を遂て此に社壇を造立
し。天満大自在天神と崇め奉る。然れども御眷属十六
萬八千の神鬼尚も静まらざりけるや。村上院天徳
二年に内裏圓融院天元五年まで。前後廿五年が間に大内裡
諸司八省三度すべて焼にけれ斯て可有よりなべて再び
造営あるべしとて。魯般が斧を運らして新に造立さるる。
柱に蝕て一首の歌をなせり
造るとも又も焼るん菅原や棟の板間のたん限なる
此歌に神慮猶御納受なりけりと驚きあるべしとて
時の主上一條院正一位大政大臣の官位を被贈ける。勅使安楽
寺に下向有て詔書を讀上被申ける時。天に声有て一首の
詩きこえける
昨為北闕蒙悲士　今作西都雪恥人
生恨死歓其我奈　今須望足護皇基

其後ようう神の嘆てもを鎮てうひろろるや。国土も穏こけれ
偉哉本地を尋ぶ。大慈大悲の観自在菩薩弘誓の海深く
して。群生済度の船彼岸に到らんとのたまひ垂跡を申
せば天満大自在天神應化の利物日に新にして。一来結縁乃
人所願心に順つて成就さ。是を以て上自二人下至萬民仰
の首を不傾とつふ事なし。其後後冷泉院治暦四年八月十
四日内裡造営の事始あつて。後三条院延久四年成就して。
四月十五日御遷幸ありしが又後程なく安元二年日吉山王
の御祟に依て。大内の諸寮一宇も不残焼失る。果して
空海大師前表の讖不違支如斯其後八国の力衰へ代々乃
君も大内裏造営の御沙汰なるよ。今新に兵革の
後世安らかに国費へ民苦で不帰馬千花山陽不放牛千桃
野時節大内裏を可被作と。我朝に古今未用紙銭を作
て諸国の地頭御家人の所領に課役を被懸条天地の神
慮に違ひ驕誇災ひの端も成ぬらんと智臣は眉をそ顰申
されける。
評して曰玄恵法師菅神の始終を附録するふ。例の虚説
偽言を交へて文章の形勢を粧る。是此法師が癖なり。
菅公は誠忠天地を感動せ。何ぞ一時の讒佞を由怒有
て愚痴に成らんや。古書を拝賢するに配所小なれ
こと三年。都府楼前ふあるども終に登りて観覧の
観音寺近けれども一度も往て遊行の思ひなし。たゞ君の
御問を恵び御敬を在く三年一室を出のらず。さるぞ
彼地は在て仲秋の詩ふ

去年今夜侍清涼　秋思詩篇独断腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

此詩を視て知べし。配所ふ在て君を忘まゐざる忠誠言外ふあり。其文中よりあらゐ所の詩歌一言も君を忘れ讒者を憤ゐあ詞迄。菅公の誠忠仁徳天地感動し人心尊敬を讒よ因て配所よ薨じゐ天神地祇萬民霊鬼豈こゝを悼ざらんや。豈こゝを怒らざらんや。其ふ気重て變災あり。此故ふ延喜十年大旱あり。ふ十三年大風ふ十四年正月十二日洛中火災ふ洛外洪水翌年七月日輪光を失ひふ十六年加茂川溢て洛中洪水ふ十七年隻大旱ふ廿一年太子保明親王（時平公の甥）薨じ帝太ふあたれひて菅公左遷の宣旨を焼て正二位を贈ゐたまひ

年号を延長と改めゐ然れども人情いまだ安からず天地鬼神の憤ゐ散ぜざる故よ。延長三年又旱魃ふ七年又洪水ふ八年雷清涼殿よ降て天下の人情安からざるより感動してかくの如し。時平の悪よ与する輩已ず悪気を以て天の悪気をもくゐ心と撃て死しなるあり。況や時平大臣延喜九年ふ薨じ。右大臣光ふ十二年よ薨じ。藤定国ふ同三年六月よ薨し。藤菅根ふ十三年よ薨じ。是等の人清涼殿の雷死よりいたるふ以前よ失て雷死の清貫希世ふ菅公を讒せし者よあらず。若一念の怨あらば何ぞ延喜三年より延長八年の久し紀を待んや。これ因て見る時ふ法性坊尊意の室よ入りていふも全く虚言なるよ足ず。今末世ゐ人口を解せんが為ふ此事を断る　堀原甫謹書